

目 的 及 び 事 業

目 的： 本法人は、科学技術の振興並びに次代を担う青少年の健全育成のための助成等を行い、もって世界の人びとが共に繁栄を享受し、心豊かに生きることのできる社会づくりに寄与することを目的とする。

事 業： この法人は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1)科学技術の振興に寄与する研究並びに諸事業に対する助成
- (2)青少年の健全育成に寄与する研究並びに諸事業に対する助成
- (3)科学技術の振興及び青少年の健全育成に関する講演会、シンポジウム、講座、セミナー等の開催
- (4)その他この法人の目的を達成するために必要な事業

マツダ財団は

科学技術の振興
青少年の健全育成

分野の社会貢献を行っています。

科学技術の振興

○研究助成

募集期間：例年4月～5月頃

現在並びに将来にわたって解決が求められている、科学技術に関する基礎研究及び応用研究に対する助成。「若手研究者」、「萌芽的研究」、「循環・省資源への寄与」を優先して助成。この中から特に優れた研究に対して授与する「選考委員奨励賞」も併設。対象は、全国の大学及び研究機関。
(累計件数 734件 累計金額 10億250万円)

○事業助成

募集期間：例年4月頃

中国地方で開催される小中高の生徒を対象とした「科学体験」に関する研究会等に対する助成。
対象は、中国地方の大学及び研究機関、民間非営利団体。
(累計件数 286件 累計金額 3,036万円)

○科学わくわくプロジェクト

青少年の科学離れへの対応として、小中学生や高校生を対象に科学にわくわくする機会を提供し、「科学するところ」を養うことを目指した事業。
広島大学との連携で、同大学の知的資源を活用した地域貢献プログラムとして実施。



青少年の健全育成

○研究助成

募集期間：例年4月～6月頃

次代を担う青少年の健全育成に寄与する研究に対する助成。市民活動との連携強化を図り、市民活動活性化に寄与する実践的な研究に注力。対象は、全国の大学及び研究機関。
(累計件数 169件 累計金額 1億7,248万円)

○市民活動支援

募集期間：例年10月～翌年1月頃

次代を担う青少年の心豊かな成長の一助となる、地域に密着した活動に対する、資金・人材・ノウハウにわたる総合支援。
対象は広島県及び山口県の青少年関係の民間諸団体。
(累計件数 580件 累計金額 1億7,460万円)

○感動塾・みちくさ

児童・生徒、指導者、ボランティアの創意工夫を育む「感動塾・みちくさ」を開催。(公財)広島市文化財団との共催。

○スタートラインプロジェクト

被虐待児等の成長や、それを支えるスタッフの能力開発を支援する事業。NPO法人ピピオ子どもセンターとの連携。

○大学講義

広島地区の大学を対象に開催。2014年度は、安田女子大学にて「ボランティア活動」を実施。

○講演会

本財団の活動主旨を広く皆様に知っていただく活動の一つとして開催。

2009年11月 茂木健一郎氏 「脳を育てる習慣」
2010年11月 養老孟司氏 「生きる力」
2011年11月 姜尚中氏 「『悩む力』とこれからの日本」
2012年11月 立花 隆氏 「二十歳(はたち)の君へ」
2013年11月 阿川佐和子氏 「聞く力」

(数値は2014年7月1日現在)

名 称：	公益財団法人マツダ財団
設 立：	1984年10月26日
公益法人への移行：	2010年11月1日
所管行政庁：	内閣府
事業の概要：	世界の人のびとが共に繁栄を享受し、心豊かに生きることのできる社会づくりに寄与するため、科学技術の振興及び青少年の健全育成に寄与する研究・諸事業に対する助成、講座・セミナー等の事業を行う
住 所：	広島県安芸都府中町新地3番1号 マツダ株式会社内 〒730-8670
電話番号：	(082) 285-4611
ファックス：	(082) 285-4612
E-mailアドレス：	mzaidan@mazda.co.jp
ホームページ：	http://mzaidan.mazda.co.jp/

マツダ財団 第29回市民活動支援一覧 ―青少年健全育成―

活 動 名	団 体 名	ページ
外国籍児童生徒のための日本語学習支援	NPO こどものひろばヤッチャル	1
千羽鶴ファクトリー構想の推進事業	特定非営利活動法人千羽鶴未来プロジェクト	3
つながれ！あなたも私も「復興者」！	学生ボランティア団体 OPERATION つながり震災復興ボランティア	5
ロボット競技へのチャレンジを通じた知的好奇心の醸成活動	ロボカップジュニアジャパン広島ブロック運営委員会	7
映画製作参加による青少年育成プログラム	市民活動で映画製作をする会	9
子どもシェルターの運営	特定非営利活動法人ピピオ子どもセンター	11
広島県居住の外国人に対する日本語学習機会の提供と異文化理解を深める交流	日本語教室ピース	13
10周年記念！ぼくたちのキャンプファイヤー場をつくる100人の夏CAMP(1泊2日)&10周年記念誌づくり	NPO 法人ほしはら山のがっこう	15
戸河内小学校夢配達人プロジェクト 手作り間伐材鉛筆・遊具づくり	戸河内小学校夢配達人プロジェクト実行委員会	17
よみがえれ！永慶寺川のホタルたち	NPO 法人おおのの風	19
中高校生を被災地の役に立てる人材に育てる事業:第2ステージ	特定非営利活動法人よもぎのアトリエ	21
カンナがつなぐ平和のバトン ―カンナプロジェクト―	広島市立大州小学校 カンナプロジェクト	23
大朝小学校における環境学習の推進に伴う課題解決のための実施計画再構築事業	大朝地域資源保全隊	25
「軀の町再発見」の旅	福山市立軀小学校軀探検クラブ	27
若年者を対象とした農業ボラバイト事業	NPO 法人いきいき農業応援し隊	29
探検クラブ	特定非営利活動法人これからの学びネットワーク	31
青少年主体性育成プログラム(国際分野)	ワンダー・ティーンズ(任意団体)	33
子どもと大人の世代を越えたディスカッションイベント「こどなひろば」の開催	こどなひろば中国支部	35
子ども中心の伝統芸能“狩留家シャギリ”の復活	特定非営利活動法人NPO狩留家	37
災害時、まず「いのちを自分で守る～自助～」	府中町災害ボランティア赤十字奉仕団	39
いのちの教室	特定非営利活動法人SPICA(スピカ)	41
福島と広島の子供たち 夢のコンサート	福島と広島をつなぐ会	43
震災移住親子と仲良く学ぶ魚魚(とと)教室	呉市市民公益活動団体Team JIN「仁」	45
学生ボランティア「ほんわかプロジェクト」による、積雪地の高齢者宅等での除雪及び島しょ部での柑橘農家の支援	ほんわかプロジェクト応援団	47
第16回 日本ジャンボリー	日本ボーイスカウト山口県連盟山口第3団	49
こどもっちゃ！商店街	こどもっちゃ！商店街実行委員会	51
「SL べんけい号の復元」をテーマにした地域活性化と子育て支援イベントの開催	NPO 法人下松べんけい号を愛する会	53
子供達と自然に学ぶ	ボランティア琴音の風	55
チャイルドラインやまぐち開設 10周年記念 チャイルドライン夢メッセージ展	NPO 法人子ども劇場山口県センター	57
小学生からゴミ問題対策教育	彦島山中町自治会	59
こども元気塾 with 清光	こども家庭支援センター清光	61
合 計	31 件 800 万円	

活 動 名	団 体 名	NPO こどものひろばヤッチャル
	地 域	広島県東広島市
	代 表 者	代表 間瀬 尹久
	支援金額	25 万円
活動概要		
今年度の活動は次の3点であった。 1.学習支援 日本語支援、教科学習支援を放課後と土曜日午前中、夏休みは週3回、それぞれ2時間程度行った。 2.バスツアー 日本社会や文化を体験を通して知るためにバスツアーを年2回行った。 3.ボランティア研修会 ボランティア向けに学習支援や子どもに寄り添う支援の方法などについての研修会を2回開催した。 4.保護者会 子どもたちの保護者を対象とした学校教育についての説明会を開催した。 ◆実施時期 学習支援:火曜の放課後及び土曜の午前。夏休みは週3回。それぞれ2時間程度 バスツアー:夏休み、春休みにそれぞれ1回行った 研修会:12月および3月 保護者会:7月 場所 主に東広島市市民文化センター2階研修室 バスツアーについては宮島、広島市内、東広島市内 ◆参加人数 1.学習支援:こども764名、ボランティア460名 2.バスツアー:こども58名、保護者9名、ボランティア12名 3.ボランティア研修会:52名 4.保護者会:6名 参加総人員:1,361名		



にはんごひろば U18 教室風景



高校入試に合格してピースサイン！



第2回外国につながるこどもの支援研修会



福富町体験ハウスで U18 メンバー大集合
(バスツアー)

◆実施に伴う効果

- 1.この活動を行うことで、地域の人々に外国につながる子どもたちが存在することを認識させることができた。
- 2.教育委員会とのパイプができ、学校の先生方ともコミュニケーションが取れるようになりつつある。
- 3.ボランティアに広島大学の学生が参加していることで、大学の教官にも関心を持ってもらうことができた。
- 4.研修会を行うことで、東広島市だけでなく、近隣地域の子どもたちの支援を行っている団体との情報交換ができるようになった。

◆苦勞した点

- 1.自分の意志に反して日本にやってきた子どもたちは、学校生活や日本の生活に慣れず、学習にも向かうことができない場合がある。また、家庭環境も決して良いとはいえない場合が多い。このような子どもたちにどのように将来の夢をもたせられるか。
- 2.所属する学校によって、日本語など外国につながる子供たちへの教育環境が違う。学校の日本語担当教師や学級担任との連携が必要であると思うが、なかなか難しい。現在教育委員会担当者とのパイプはできているので、そこから学校と連携ができるように今後していきたいと思う。
- 3.子どもたちの保護者は自分自身も日本の生活に必死である。子供の教育については学校に任せていると言う保護者が多く、言葉の壁が厚いので、心配なことがあっても学校に問い合わせることは少ない。ヤッチャルのメンバーは個人的にいろいろな相談を受けているため、保護者会が必要だと考え、毎年行っているが、参加者が少ない。今後どのようにしていくか開催時期や場所など工夫が必要だ。
- 4.高校進学、さらに大学進学は言葉の壁や経済的な困難を抱えている子どもたちには大きなハードルである。子供たちに自信をもたせ、継続して努力をさせていくことが非常に難しい。
- 5.子供たちの生活に関わる行政文書、学校関係書類等の記入や諸手続きすべてにおいて、親が自力で対処するのが困難であり、学習支援に加えて生活支援、とりわけ高校進学支援に力を注ぐ必要がある。

◆今後の課題・発展の方向性

- 1.将来の目標を持つことにつながる活動(職業体験、先輩との交流会など)を行い、子供たちの日本社会での自立を促すことを目指していく。
- 2.同じ活動をしている近隣の団体と連携し、課題を共有し、協働して解決策を模索する。
- 3.教育委員会とより緊密な関係を築き、情報交換を密に行い、子供たちの学習支援を強固なものにしていく。
- 4.商工会、青年会議所などに連携を働きかけ、子供たちの職業意識を育む活動を計画する。

◆活動を終えての感想・意見等

- ・頂いた助成金があったので、研修会、バスツアーをそれぞれ 2 回行い、また、子どもの支援の参考になる書籍もたくさん購入できました。この一年は充実した活動ができたと思います。
- ・来年度以降も今年度同様、子供たちに寄り添う活動を続けていきたいと思っています。

活動名	団体名	千羽鶴未来プロジェクト
	地域	広島県広島市
	代表者	代表理事 重松 まゆみ
	支援金額	25 万円
千羽鶴ファクトリー構想の推進事業		
活動概要		
広島市平和記念公園に集積する年間約 10 屯(広島市公表)の千羽鶴を使って青少年の平和教育、障害者支援を行うため、広島市周辺の 27 の作業所と連携し、社会実験をはじめました。 ＊社会実験(障害者が利用する 27 作業所が下請け作業から千羽鶴再生を目的としたメーカーになる為の準備) 期間中、色々な解体方法(大型模型、学校訪問型、グループ受入、作業所内、保護者)を体験していますが、千羽鶴を解体する作業そのものが、障害者に多くの刺激を与えていることになっています。その一番の要因は、小中学生と実施する解体作業にあります。参加する健常者の子ども達には、障害者理解。障害者は子ども達と接することで、服装が変わり、身なりが整い、自分たちの役割をしっかりと理解できる。一度で終わるイベントでは無いので、継続ができれば、それだけ多くの子ども達に、障害者理解を行うことで、イジメの無い社会に近づけることが出来ると考えています。 ◆実施時期 通年 ◆参加人数 ①27 作業所 15 名×27 作業所=405 名 ②小中学生 クラス(40 名)×4 校=160 名 ③修学旅行生 1 グループ=25 名 ④保護者 20 名×27 作業所=540 名 ⑤広島市いくせい会(祭り参加)=300 名 ⑥広島JC(ギネスに挑戦イベント)=300 名 ⑦各作業所祭り 20 名×27 作業所=540 名 参加総人員:2,270 名		



青崎小学校への出前学習講座



千羽鶴解体の体験



タペストリーを説明するNPO事務局長



重松理事長からタペストリーを受け取る作業所のスタッフ

◆実施に伴う効果

- ・解体作業の中で新しいものに生まれ変わることによってみんな希望を託しているように感じられた。
- ・作業を熟知した仲間が他の仲間をフォローするなど共助の姿勢が広がった。
- ・色とりどりの折鶴を見ることで利用者にも刺激となり、活動の活性化に繋がった。
- ・ほかの作業所との交流が持て、どのように活動・活躍をされているのか知るきっかけとなった。
- ・解体をすることでグッズ販売の意識も変わってきたように感じる。
- ・生産活動に参加できない方も一緒に作業することができた。
- ・見学者からの注目度が高い。
- ・折鶴についているコメントに、解体する人たちが癒されていた。
- ・再生紙だけでなく他の利用方法をみんなで考えました。
- ・再生紙を既存製品を入れる袋に活用しようという案が現在上がっている。

◆苦労した点

小中学校生との解体作業を中心に、障害者理解を進めるため、広島市観光課と提携した修学旅行生誘致活動に向け活動を始めました。これは、修学旅行生を対象とした平和学習と障害者理解をテーマとした学習プログラムを、広島市が旅行業者に 2013 年 10 月からPRを始めたもので、千羽鶴再生紙を使ったリーフレットを提供しています。修学旅行生の受入は 27 の作業所が出来るよう、現在トレーニング中で、先日貴財団からの支援金で購入した、学習用タペストリーを作業所へ寄贈。早速利用が始まっています。

◆今後の課題・発展の方向性

今後の課題は、タペストリーを使った平和学習が、NPO以外の作業所スタッフが広島独自の平和学習プログラムを使えるようトレーニングすることにあります。

◆活動を終えての感想・意見等

本格的活動は、今からです。ますますご支援、ご協力を頂きますようお願い致します。現在、他の団体とタイアップした平和学習プログラムの検討に入りました。

活 動 名	団 体 名	学生ボランティア団体 OPERATION つながり震災復興ボランティア事業部
つなぐれ！あなたも私も「復興者」！	地 域	広島県東広島市
	代 表 者	震災復興ボランティア事業部長 富吉 亘哉
	支援金額	35 万円
活動概要	2013 年度当団体は、以下の 3 つの活動目的のもと活動を展開した。 1.震災復興支援ボランティアの企画・運営・参加を通じて、学生に気付きと学びをもたらすこと 2.被災地域の学生・住民の間に交流を生み出し、包括的な地域活性を目指すこと(地域連帯) 3.東北、また広島での震災復興支援を通じて被災地の人々の心の健康を支えること ◆実施時期 2013 年 4 月 1 日～2014 年 3 月 31 日 つながり隊第 7 次派遣 2013 年 9 月 2 日～13 日 つながり隊第 8 次派遣 2014 年 3 月 9 日～20 日 亘理プロジェクト第 1 次派遣 2013 年 7 月 13 日～17 日 亘理プロジェクト第 2 次派遣 2013 年 8 月 19 日～24 日 亘理プロジェクト第 3 次派遣 2013 年 11 月 1 日～5 日 亘理プロジェクト第 4 次派遣 2014 年 1 月 11 日～13 日 亘理プロジェクト第 5 次派遣 2014 年 3 月 14 日～16 日 復興カフェ 2013 年 4 月～2014 年 1 月 サマーステイ 2013 年 8 月 7 日～11 日 ◆参加人数 広島大学生 延べ 60 名 亘理高校生 延べ 30 名 福島の小中学生 延べ 15 名 東日本大震災被災地域の住民 延べ 100 名 参加総人員:205 名	



宮城県名取市閑上地区にて遺留品搜索
(つながり隊第 7 次派遣)



宮城県亘理町旧館仮設住宅にて地元高校生と一緒に足湯マッサージ(亘理プロジェクト第 3 次派遣)



宮城県亘理町旧館仮設住宅にて正月イベント
交流後の集合写真(亘理プロジェクト第 4 次派遣)



12 月復興カフェ「3.11 のあとの日常」ワークショップ
広島大学東広島キャンパス内

◆実施に伴う効果

つながり隊では、現地のニッペリア仮設住宅で継続的な支援活動を展開したことにより、住民との親密な関係を築くことができ、当団体のメンバーへの住民の信頼がより一層深いものになった。また、つながり隊の派遣を終え、当団体のメンバーが広島へ帰った後でも、住民と個人的に手紙交換をするなど、支援する側、される側の関係ではなく、人として一對一の深い関係をつくることができた。また、現地の農業や漁業の支援などでは、人手を必要としているというニーズを満たすことができ、農業や漁業を行っている人々に感謝された。

亘理プロジェクトでは、地元・亘理町の高校生と共に活動を行い、高校生が主体的に仮設住宅の支援活動を行うことができるような環境づくりを行うことで、高校生の仮設住宅支援活動に対する意識を高め、より活発に高校生が仮設住宅への支援活動を行うことができるようになってきた。

復興カフェでは参加学生に対し、様々なワークショップを通して、東北への関心や理解を深める機会を提供することができ、実際に当団体のメンバーではない参加学生がつながり隊に参加するなど、広島大学生が震災復興支援に踏み出すことのできるようなきっかけをつくることができた。

サマーステイでは、レクリエーションで、広島と福島の子どもが協力してレクリエーションを行うなど、広島と福島の子どもの交流を深めることができた。

◆苦勞した点

2013 年度の当団体の活動は、当団体のメンバーを東北へ派遣し、活動をする機会が多かったため、その派遣にかかる予算を確保するのに苦勞した。最終的には、メンバー個人の負担額を増やすなどで対応したが、これから長く震災復興支援活動を現地で続けていくためには、メンバー個人の負担をなるべく少なくする必要があると感じている。

◆今後の課題・発展の方向性

今後のつながり隊については、活動の地域を絞り、特に現地の仮設住宅に対する支援活動を強化させていきたいと考えている。具体的には、つながり隊で長らく支援活動を行ってきた仙台市のニッペリア仮設住宅の支援活動を継続的に行っていくために、同じくニッペリアの支援活動を行っている他大学の学生や仮設住宅の周りの地域の人々と協力し、ニッペリア仮設住宅の支援ネットワークをつくっていききたいと考えている。

亘理プロジェクトでは、2014 年度をもって、亘理高校生への活動の引き継ぎを達成し、それ以後は亘理高校生のみで仮設住宅の支援活動を行っていけるように、亘理高校生が活動を主体的に行えるような環境づくりを行っていく。

復興カフェは参加学生に震災を風化させないため、また防災の大切さなどを広めるために今後も広島大学内での活動を継続させていく。

サマーステイについては、志和東地区の住民主体での活動となったため、今度、開催するかどうかについては不明である。なお、現時点で 2014 年度の開催予定はない。可能であれば、サマーステイのような活動を当団体が独自に企画し、福島の人々に対するアプローチも行っていければと考えている。

また、2013 年度の活動を通して、東日本大震災で学んだ教訓を生かし、これから起こり得る災害に備えることの重要性を強く感じた。今後は、防災を広島で多くの人に広める活動にも重点を置いていきたいと考えている。

◆活動を終えての感想・意見等

当団体に対する長らくのご支援感謝いたします。本当にありがとうございます。おかげさまで、昨年度も当団体は自分たちが考える最大限の支援活動を展開することができました。当団体は 2013 年度の活動を通して、震災から 3 年以上が経過し、震災当時とは状況が大きく変わりつつある東日本大震災の被災地では今までとは違った形での支援活動が求められているということを強く感じました。また、これから起こり得る災害に対して、東日本大震災を通して私たちが学んだ教訓を生かすということの大切さもひしひしと感じました。当団体の活動に参加した学生は自分たちにできることは工夫次第で無限にあると実感しています。2013 年度のご支援のおかげで、参加学生も継続した支援活動を実行でき、学びと成長をもって、プロジェクトを発展させていくことができました。これらの気づきをもとに、2014 年度は被災地での活動、そして広島で防災を広める活動の二つを大きな軸として活動を継続、そして新たに展開していきたいと考えております。2013 年度は大変お世話になりました。

活動名 ロボット競技へのチャレンジを通じた知的好奇心の醸成活動	団体名	ロボカップジュニアジャパン 広島ブロック運営委員会
	地域	広島県広島市
	代表者	代表 山野 真一
	支援金額	25 万円
活動概要	こども達の知的好奇心を刺激し、科学への関心を高めて、次世代のエンジニアの卵を育む事を目的とする。自律型ロボットを使用した競技を行なう中で、「現象の把握」から「仮説・検証」といった「問題解決」のプロセスを楽しみながら学べる場を提供してゆく活動である。 本年度は、体験会後にフォローアップ講座を設け、「基礎知識」の修得の機会を設け日本大会に向けた取り組みへの参加を呼び掛けた。 ・2013 年 5 月の日本大会(会場:玉川学園)に 4 チーム 8 名が参加した。 ・2014 年 3 月の日本大会(会場:埼玉大学)に 5 チーム 13 名が参加した。 ◆実施時期 2013 年 4 月 10 日～2014 年 3 月 30 日 広島県内:広島地区 広島市子ども文化科学館、広島市青少年センター 福山地区 福山大学、福山大学宮路茂記念館 ◆参加人数 ロボカップ体験会 6 月 1 日、2 日(子ども文化科学館)80 名 ロボカップ体験会 8 月 17 日(福山大学)12 名 せとうちオープン大会 21 名 ロボカップジュニア広島大会 51 名 ロボカップ練習会 延べ 138 名 参加総人員 302 名	



ジャパンオープン



体験会



広島ブロック大会



せとうちオープン 2013 懇親会

◆実施に伴う効果

- ・2013 年ジャパンオープンに 4 チーム 8 名が代表として参加。
(サッカーB オープンで 6 位、レスキューA プライマリで 4 位)
- ①ロボカップジュニア体験会
参加者からは、「難しかったけど面白かった」「またやりたい」と、好評を得た。
保護者からは、「教育的側面が良い」「躰の要素が良い」という評価を得た。
- ②ロボカップジュニア・フォローアップ講座
「どう指導してよいか判らない」という保護者から、「基礎が学べるから良い」という評価を得た。
- ③ロボカップジュニアせとうちオープン競技会
大学との調整が難航し、1 か月前の告知であったが、遠方は滋賀や福岡から参加あり。
世界大会でのトップレベルの強豪の参加もあり、大変好評であった。
- ④ロボカップジュニア広島ブロック大会
広島代表として、2014 年日本大会へ 5 チーム 13 名を選出した。
(サッカーA 2 名、サッカーB ライトプライマリ2 名、セカンダリー2 名、レスキューA プライマリ 3 名、
レスキューA セカンダリー4 名 <各カテゴリー1 チーム>)

◆苦勞した点

- ①広報活動
体験会のチラシを広島市内/福山市内の各小中校に配布する際、「配送」に苦慮した。広島市は市役所に「ポスト」が設けてあり、市教委の協力の下、これを使わせて頂いた。その他はメール便での配送とした。メール便での配布エリアからは、応募が著しく少ないことから、「配布していない」可能性が高い。これは今後の課題である。
- ②保護者の理解
「子どもが自身で問題を解決してゆく」競技であるが、「保護者の介入」「保護者の放任」の両極端が多い。基礎技術は「指導の範囲」であるが、「どうしたいのか」は本人が考えねばならないものであり、ここの(保護者への)説明が今後の課題である。
「自分でやりたい保護者」向けに、近隣のブロックと合同で「おやじリーグ」の開催を企画している。ハードウェアの規定を少し厳しくし、限られた中で「子供たちの手本となる」「子供たちに技術を開示できる」という前提の競技として 2014 年 5 月のせとうちオープンで実施する。
(※次年度報告書に記載します。)

◆今後の課題・発展の方向性

- ①子供たちの継続性
毎年、「体験会に参加し、県内予選に出るが、敗退してそこで辞めてしまう」という子が多い。勝ちあがるチームは「続ける」から強いのであるが、保護者含めて多くがそこに至らない。一方で、全国大会出場者は、懇親会で「友達」を作って、「また会うため」に頑張る子達も多い。そこで、地方大会である「せとうちオープン」を継続し、内容を充実させてゆくことで、「子供たちのコミュニティ」の形成に力を入れてゆく。(実際には、「保護者のコミュニティ」も非常に大切であり、保護者の社交性が子供に反映される部分が多い。Facebook などの SNS で連携が広まってきている。)
- ②卒業生の活躍による継続性
日本大会への出場経験のあるロボカップの卒業生は、スタッフとして活躍する例が多い。進学先、就職先の他のブロックでもスタッフとして活躍しており、運営に携わる事で「ボランティア精神」や「コミュニケーション能力」を育むよき場となっている。保護者のコミュニティで連絡を取り、「卒業しても携わる場」を提供してゆく。(※日本大会では、この OB 達が同窓会的に集まり、スタッフとして活躍している。)

◆活動を終えての感想・意見等

「意味」「意義」「価値」というのは、「観る人」それぞれに異なるものだということを毎年感じます。運営サイドは「技術」「科学」というよりは「問題解決」「ルール」「礼儀」を重んじているのですが、保護者の方々には「難しそう」「無理」「お金がかかりそう」と受け取られる事が殆どです。広島では「伝える側」が教職員や塾講師など「ではない」ため、他の地域以上に苦戦しています。ただ、7 年以上の活動により、全国の保護者&運営者から情報が入るようになってきました。他ブロックでの成功例を試すなど、挑戦を「継続」していこうと思います。今後ともよろしくお願い致します。

活 動 名	団 体 名	市民活動で映画製作をする会
	地 域	広島県広島市
	代 表 者	代表 浜野 省三
	支援金額	25 万円
映画製作参加による青少年育成プログラム		
活動概要		
1. 本会の内容は、市民活動を基本とし一般的な趣味の映画製作をさらに活動内容に生涯学習としての側面を重点に置き、主に広島市内の公共施設(公民館・市立図書館・市管理施設)にて指導演習(撮影)を行っている。これは広島市における市民活動であることを参加者全員が意識し、かつ活動における安全面にも考慮しているためである。 2. 活動内容としては、日常ではテレビ・映画等鑑賞者の立場であるが、本プログラムにおいては逆の立場による映画製作に参加しプロ映画監督を講師に迎えキャスト・スタッフとして疑似体験を行い、日常生活における映画・ドラマのテーマ・製作意図をより深く得られることにより日常生活に役立つことが出来るようにプログラム内で学ぶ。 3. 社会問題等は書籍や映像を見て習得することが一般的であるが、本活動にて実際の撮影において、その問題をより深く自ら撮影に挑む際に学習し、作品製作に際しクオリティの高いものへと努力することで、映画製作者としてまたは、キャストとしてあたかも社会問題の当事者となり疑似体験ができる。この点はかけがえのない体験として当人に人生の中で深く心に残り青少年の時期における道徳観・価値観・人生観を形成する大きな糧となることは他県プログラムでも実証されている。 ◆実施時期 平成 25 年 4 月 1 日～平成 25 年 12 月 9 日 広島市中央公民館 青少年センター 市内公園 および 広島市安佐北区可部町 ◆参加人数 ① 参加人員 54 名(内 青少年 19 名…男 8、女 11) ② 参加人員 20 名(内 青少年 15 名…男 6、女 9) ③ 参加人員 65 名(内 青少年 25 名…男 9、女 16) 参加総人員:139 名(内 青少年 59 名…男 23、女 36)		



映画撮影体験ワークショップ



集合写真



映画製作ワークショップ 演技指導



映画撮影体験(フラッシュモブ)

◆実施に伴う効果

① プロ映画監督・女優と共に、映画製作体験を行ったことで、日頃地元広島では、舞台や地元自主映画等にて出演している青少年たちであったが、今回の製作体験は、製作映画をプロが参加する映画祭やコンテストに出品を目標として定め、プログラムの実施をおこなった。通常では経験できないプロの製作現場を経験し参加者全てが体験した内容が今まで経験したことのない内容であり、刺激になったことで今後の活動に役立つと感想であった。また、今回参加した 20 歳と 24 歳女性・42 歳男性はこのプログラム参加後、地元 CM 撮影等にて機会を得ることができて活躍しておりプログラムの実践が大いに役立ったと報告を受けている（安田女子大 CM 創建ホーム CM 等）製作作品は 広島ダマール映画祭 TSS ショートショートフィルムフェスティバル ショートショートフィルム&ASIA 映画祭に出品。

もう一方では、撮影現場を可部町の古民家にて行い、もう一つの目的として広島のごき時代の家屋や残されている古物を生で見学し明治から昭和初期にかけての生活に触れることを体験し、現代の生活と見比べながら生涯学習とした。明治から昭和初期の生活什器や調度品の数々に参加者は、生活の一端を垣間見る気がしたと同時に品質や工夫の点を感じたと感想を述べている。

② 広島市青少年センターにて日頃活動している青少年を中心に映画製作体験を行った。全員でミュージックビデオを製作する目的の元に地元音楽活動グループ「SNOWDROP」を中心に映画撮影体験を進めた。日頃活動している青少年センターでの撮影は、映画製作体験をしたことのない者がほとんどであり、撮影の進行・演技・役割について勉強になったとの感想をしている。もう一つの目的である街中のフラッシュモブ撮影体験であるが、結果的に失敗（緊張と恐れのため）に終わり、各参加者がいかにプロの撮影・作品製作が困難であるかということもまた体験した。製作作品は、よなご映像フェスティバル出品 広島市内にて上映各参加者の感想として、映画製作や演技に興味がわいたとしている。22 歳女子 1 人は、この後地元演劇団体に参加し、11 月に南区民文化センターで初舞台経験をした。

③ ①に映画製作ワークショップの開催を踏まえ、講師であるプロ監督と監督役の女性との感想に青少年層の参加をもっとして欲しかったとあり、プロ監督に多忙の中、度重なる交渉の結果、第 2 回目の映画製作ワークショップを開催することが出来た。今回は、青少年層の参加を促し、第 1 回の開催にて実績があったため、広島フィルムコミッションメーリング告知・ロコミで多くの方が参加申し込みをしていただいた。今回は演技者を中心に映画の中で監督・スタッフが要求していることを重点において、座学・演習をおこなった。演劇ワークショップは参加した経験の人が多かったが、映画監督の要求は、全く違ったものがあったため、すべての参加者から初体験で新鮮なことばかりであり、役に立ったとの感想が寄せられている。機会があれば映画出演に応募したいとの声が多くあった。

◆苦労した点

【予算】各回の参加費用を無料とし、御財団の助成を有効利用させていただきましたが、③については、資金的に大幅超過となったため、講師と交渉の上下額にて依頼しました。3 千円徴収しましたが、東京都内においてワークショップ開催時参加費用は標準 3 万円と聞いています。予算を編成し出来る限り低額に抑えることとしたが、東京から招聘するとすると、交通費宿泊費のみで 10 万円最低かかり、これに講師料を上乗せすると高額になることが予想されます。

【外部 PR】今回は、開催実績がないために広島フィルムコミッションにて当初告知しましたが、応募数が少なく、呼びかけを多くすることとなりました。来年は一定の実績が付きませんがさらに情宣活動を活発に行うことが必要と考えています。中国新聞社のご厚意で趣旨をご理解いただき記事にさせていただきました。

【参加者】青少年を多く募集しようと心がけたあまり、逆に告知内容が浸透しない部分がありました。よって、幅広くバランス良い参加募集心がけ情宣活動を行う必要があると考えます。

【地域の理解】①については、安佐北区可部町 可部街道まちづくりの会との共催を願いましたが、会への理解度・認知度が薄く時間的な制限もあり、協力という形のみとなり古民家と旭鳳酒造のロケ地の提供紹介のみとなりました。ですが、中国新聞社の理解を得て記事となり一定の認知をいただきました。今後、出品作品の成果により町祭り・上映会等にて地域まちづくりへの還元活動を考えています。

②については、広島市青少年センターにおける青少年育成活動の一部と認識頂き全面的に協力していただきました。青少年センター施設利用・備品の借用について、無償にて提供を受けることが出来ました。また、館長以下職員をはじめ協力いただき、特に青少年センター内活動団体「魁」代表には青少年センター内にて世話人として段取り・仕切り等にて活動していただきました。

◆今後の課題・発展の方向性

総括として、東京から演劇のワークショップと称して行われたことが広島では多いと聞いているが、映画出演に特化してワークショップを開催されることは希少であったとのこと。また、子供向けに近年あったらしいがやはり、若年のために芝居の基本が多かったらしいとのこと。③開催は来年度のワークショップを多くの方が希望しており可能な限り開催の意向です。広島市中央公民館開催時に、参加費用徴収金額について問い合わせがあり総額面から商用について利用制限がかかることもあり、度重なる協議の結果、市民活動利用と認定をしていただきました。この点は講師料と徴収金額のバランスが低額だけでなく総額予算の編成に配慮の必要があり、徴収額が高額になれば商用利用として判断され、施設利用費が 4 倍になることは今後の課題です。

広島市においては、文化的認識について音楽芸術 舞台芸術については手厚い助成等が見受けられているが、映画文化については、文化というより趣味の域であるという認識が行政・市民の間にまだ根強くあります。その一因に、製作作品が一定のレベルに無いことが大きく原因していることは、否めません。今回行った映画製作ワークショップは、無料、または低額の参加費で、プロの現場と同様な状況を作り出し、各回においても最後に実際に映画撮影を行いました。実践を踏まえることで、広島の映画出演者・製作者のレベルが上がり、また出演機会の少ない者にとっても映画製作の舞台裏を観ることで、映画にますます興味をもつことでしょう。広島は、(故)新藤兼人監督など多くの映画監督を輩出した名作を製作された土地柄です。広島で製作された作品が広島のみならず全国的に認知されるレベルに向上されることが広島において映画文化の発展につながりワークショップの継続的な開催をし、目的が達成されると思います。

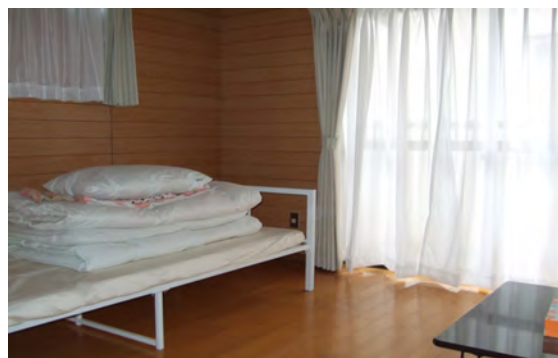
◆活動を終えての感想・意見等

当初の理念として、青少年は日常ではテレビ・映画等鑑賞者の立場であるが、本活動においては逆の立場に立ち映画製作に参加することで、撮影内容をキャスト・スタッフとして社会問題を疑似体験し作品化(非営利)する。社会問題等は書籍や映像を見て習得することが一般的であるが、本活動にて実際の撮影において、その問題をより深く自ら撮影に挑む際に学習し、作品製作に際しクオリティの高いものへと努力することで、映画製作者としてまたは、キャストとしてあたかも社会問題の当事者となり疑似体験ができる。この点はかけがえのない体験として当人に人生の中で深く心に残り青少年の時期における道徳観・価値観・人生観を形成する大きな糧となる、としました。

開催計画①②については、当初の計画・狙いを踏まえて開催しましたが、作品化まで終えたことは一定の目標を達成したと同時に少数でも、観る者の立場から表現する立場へと実践する者が現れたことは大きな喜びです。また、開催③については自らの能力のスキルアップを望む人たちがばかりであり、この方々のためにも開催し、ほぼ全員スキルアップになったとの感想には喜ばしいことと思われます。広島フィルムコミッション担当者も、今後とも開催を望まれておられました。今回の開催を通じて今後の広島映画界の発展に寄与しているのではないだろうかと思います。(やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ)

① ②については、古民家・古物への鑑賞体験・社会現象の実体験を参加者が行うことで、生涯学習の一面としても一定の成果があったと思われます。これもひとえに御財団よりの支援活動の賜物であり、一市民としても深く感謝申し上げます。

活動名 子どもシェルターの運営	団体名	特定非営利活動法人ピピオ子どもセンター
	地域	広島県広島市
	代表者	理事長 鶴野 一郎
	支援金額	30 万円
活動概要		
保護者等から虐待等を受けた子どもたちを受け入れるための子どものシェルターを運営し、居場所のない子どもたちに避難する場所を提供する。 シェルターでは、子どもたちに安心して食事がとれて、ゆっくり眠ることができる場を提供し、必要に応じて関係機関等とも連携し、子どもたちが次に進む方向を自ら見つけられる力を取り戻せるように、支援と見守りを行う。 ①虐待その他の理由で行き場をなくした子どもたちを子どもシェルターで受け入れる。子どもが入居する際には、最低弁護士2名の立会いの下、入居の意思を確認する。 ②入居する子どもには担当弁護士をつけ、親権者などとの調整やシェルターを出た後の行き先の調整をおこなう。 ③シェルターにはスタッフが交代で常駐しており、入居している子どもたちが家庭的な雰囲気の中で安心して食事がとれてゆっくり眠ることができる環境を提供する。 ④入居する子どもの状況に応じて学力の向上、生活スキルアップ、音楽活動などの支援を行う。 ⑤正規スタッフやボランティアスタッフ、子ども担当弁護士のスキルアップを図るため、研修会を行う。 ⑥理事会、事務局会議、スタッフ会議、ケース会議をそれぞれ毎月開催する。 ⑦ニューズレターを年3回程度発行する。 ⑧子どもに対する虐待問題に関する情報発信をおこなうとともに、虐待防止のための広報活動をおこなう。 ⑨男子の自立援助ホームの設立準備をおこなう。 ◆実施時期 2013 年 4 月 1 日～2014 年 3 月 31 日 ◆参加人数 平成 25 年度内の入居者 10 名 参加総人員： 10 名		



ピピオの家



「子どもの日記念イベント 2013」の劇



JaSPCAN(日本子ども虐待防止学会)信州大会参加

◆実施に伴う効果

- ・平成 23 年4月に「ピピオの家」を開所してから平成 26 年 3 月まで、延べ 30 名の子どもがピピオの家を利用しており、子どものシェルターのニーズの高さ、高齢児の居場所づくりの必要性を痛感している。
- ・平成 25 年度の入居者は 10 名で、それぞれシェルターでの安心できる環境の中で生活をおくることができた。また、シェルター退居後の家庭復帰のほか、高校卒業までの通学、作業所での仕事の体験、一人暮らしする子どもの生活スキルアップなどを支援できた。

◆苦勞した点

- ・シェルターは、携帯電話は持てない、弁護士やスタッフが同伴でないと外に出られないといった約束事を設けている。これらは子どもの安全確保やシェルターの秘匿性のため必要なことであるが、子どもたちはシェルター内での時間を持て余すとともに、次第に閉塞感を感じストレスを貯めやすくなっている。このため、2013 年度は、スポーツ、映画鑑賞などレクリエーションの機会を設けるほか、子どもの意思で勉強、読書、手芸、ピアノ練習など自由課題に取り組む時間の設定、家庭教師・ピアノ教師による学習活動等の支援などを行っているが、このような日々の生活のベースをつくることの必要性が高い。
- ・家庭環境が改善できて家庭に帰れる子どもは少なく、家庭に帰ることができない子どもたちについては就労先を探すなどしている。しかし、その数は限られており、また、仕事への定着がむずかしい子どもも少なくない状況にある。子どもたちの自立を支援していくための他機関との連携やノウハウの蓄積が必要である。

◆今後の課題・発展の方向性

- ・ピピオの家に入居した子どもたちの自立を支援するため、平成 26 年度も「スタートラインプロジェクト」を実施する（貴財団との連携）。
- ①被虐待児等の成長を支援するプログラム（被害回復、生活習慣の改善、自己肯定感の涵養、資格取得）
- ②スタッフの能力開発を支援するプログラム（講座・セミナー・研究会等の開催、ケース会議の充実、他機関の視察・他機関のスタッフとの交流）
- ③その他（広報活動の充実）
- ・平成 26 年度も、ボランティアスタッフの募集・養成講座を開催し、ボランティアやシェルター、自立援助ホームなどに関心のある一般の方に参加を呼びかけていく予定である。
- ・引き続き、男子用の自立援助ホームの設立を目指す。

◆活動を終えての感想・意見等

子どもシェルターのニーズの高さ、自立支援のための取組みをより充実させていくことの重要性を痛感している。

活動名	団体名	日本語教室ピース
	地域	広島県東広島市
	代表者	代表 岩井 実里
	支援金額	15 万円
活動概要		
外国人居住者の生活を言葉の面で支援することを主な目的とし、毎週土曜日にひろしま国際センターにて、約 2 時間の日本語教室を開催した。 授業は、レベル別の 4 クラス制で、クラスごとに決めたトピックシラバスに沿って、日本の生活で役に立ち、普段の生活にも反映できる日本語の表現や、学習者同士、また教師も交えて、楽しく会話できるようなテーマを取り入れた授業を展開し、学習者が広島の地で生活する上での支援を行った。 また、前期の最後には、半年間の集大成として各クラスでのお楽しみ会を実施し、それまでの授業で学んだ表現をフル活用した「スペシャル自己紹介」や日本の文化に触れ、文章を書く体験として「暑中見舞いづくり」等を行った。後期の最後には、全クラス合同で交流会を実施し、他のクラスで日本語を学ぶ学習者や普段クラスに参加していない地域の日本人とも日本語で交流する機会を設けた。 ◆実施時期 授業の日時:毎週土曜日 13:00～14:50(50 分×2 コマ・休憩 10 分) (会場設営・授業の反省会を含めると、12:30～15:30) 場所:ひろしま国際センター 交流ホール(広島市中区中町 8-18 広島クリスタルプラザ 6F) ◆参加人数 学習者:468 名 ボランティア教師:248 名 参加総人員:716 名		



宮島観光(神社についての説明)



交流会(ゲーム)



交流会(集合写真)



授業風景

◆実施に伴う効果

地域日本語教室の役割の一つとして、日本語表現を提供するだけでなく、広島の地に住む日本語学習者同士、また、日本人ボランティア教師との交流の場として活動することができた。例えば、授業の合間には教師が学習している言語を学習者が教える様子が見られ、「教え合い」の関係を構築したり、教室で知り合ったことをきっかけに、一緒に買い物に出かけたり、学習者の良き相談相手となったりして、言葉の面だけでなく、生活そのものについても助け合うきっかけづくりを行った。また、学習者やその家族が経営するレストランについて話を聞き、実際に近くに住む他の学習者が利用したり、学習者が近所のお店についてボランティアに紹介したりする等して、地域の情報交流を盛んに行うこともできた。また、私たちの活動を知り合いからの勧めやインターネットのページ等で知り、日本語教育に興味を持つ学生が教室を見学しに来ることも多くあった。彼らの多くは、日本語教育の現場を初めて見るということで、私たちの活動について少しでも知ってもらおうことで、広島という地域の外国人居住者の様子や日本語教育の実態について地域住民に知らせる機会になったのではないかと考えている。

◆苦労した点

上記にもあるように、教師数の不足により、授業を担当する回数が増加し、授業準備に必要な費用や、会場までの交通費の負担が増えてしまった。しかし、その反面、一人一人の経験が増え、クラスの運営や授業に対する積極性も大きくなり、それぞれの成長にはつながったのではないと思う。さらに、このような現状をきっかけに個人的に地域日本語教育の研修会や勉強会に参加する者も増え、精力的に活動することができた。

教師数の不足の原因として、外部への PR 不足が挙げられる。今年度は、ボランティアが所属している大学を中心とした広報活動のみにとどまってしまったため、現在は、来年度の活動に向けて私たちの活動と教師を募集する旨を記載したちらしやカードを作成し、広報活動を充実させるべく努力している。また、毎年恒例の交流会には、地域の人や学習者の友人などにも参加してもらいたいと考えており、授業内での大々的な告知を予定していたが、前週の大雪でクラスが中止になったことも影響し、事前に十分な告知と参加者集めをすることができなかった。そのため、昨年度より、普段クラスに関わっていない方の参加は少なくなってしまった。来年度も同様の会を設ける予定であるので、このような事態にも備え、早めの告知を心がけることや会場となるひろしま国際センターの方にも協力をお願いし、より多くの方に参加していただけるよう準備をしていきたい。

◆今後の課題・発展の方向性

来年度から本格的にひろしま国際センターからの独立運営形態となるため、毎回の授業開催の度に会場費が必要となる。よって、活動費を新たに工面しなければならない。そして、会場の倉庫も使用できなくなるため、教材や資料の保管場所について、新たな保管場所とシステムを導入する必要がある。このような状態で活動を継続するのは大変困難なことであり、再度学習者のニーズを把握し、「日本語教室ピース」の必要性を問い直し、今後の運営について改めて方針を考える必要がある。

また、より良い授業を行うために、授業教案や教材の共有を行い、過去の資料をストックする方法を導入する予定である。授業内容について共有することで他のボランティア教師の授業から学んだり、既習項目について確認し次の授業案を検討したりする際に役立てることができると考えている。

私たちにとってこの「日本語教室ピース」は学習者の生活を言葉の面で支援する場であるとともに、学習者や他大学・他学年の教師との交流の場や日本語教師を目指すものとしての成長の場でもあるため、多面性を持った非常に有意義な場であるといえる。クラスの問題点を解決し、今後も学習者のニーズに寄り添ったクラス運営を継続することで、私たちにしかできない日本語教室をつくり、発展させていきたい。

◆活動を終えての感想・意見等

今年度は昨年度の活動を継続するとともに、マツダ財団の支援により、より充実した活動を実施することができました。

改善すべき点は多々ありますが、地域の学習者に寄り添った日本語教室としてさらに発展させられるよう今後も活動を続けていきたいと思います。

活 動 名	団 体 名	NPO法人ほしはら山のがっこう
10周年記念！ぼくたちのキャンプファイヤー場をつくる 100人の夏CAMP(1泊2日)＆10周年記念誌づくり	地 域	広島県三次市
	代 表 者	理事長 檜谷 義彦
	支援金額	35 万円
活動概要		
★『10周年記念CAMP(1泊2日)』を実施。これまでに参加した子どもたちや保護者・スタッフ・地元住民総勢100人で、キャンプの2日間を通して「キャンプファイヤー場」の整地や階段、看板づくりを行う。できた広場は、今後10年間の活動で生かす。 ★『ほしはら山のがっこうの子どもたち～10周年記念誌』の発刊。活動写真に合わせてこれまで10年間関わってきた小中学生や大学生スタッフが、キャンプや自然体験でなにを学び、それがどのように日々の暮らしや活動に生かされているかの調査をふくめた記念誌を作ることによって、成長のふりかえりや今後の活動に生かす。 ◆実施時期 2013年7月1日～2014年3月31日 ほしはら山のがっこう ◆参加人数 キャンプ参加者51名(泊34名 日帰り17名／延べ85名) キャンプスタッフ17名(泊11名 日帰り4名／延べ26名) 10周年記念誌(編集部2名 寄稿17名／延べ19名)		
参加総人員:130 名		



10 周年記念誌



森の入り口に看板をつくろう！！



キャンプファイヤー場をみんなでつくったよ



人っていいね、自然っていいね。ここは、わたしたちの心のふるさと！みんなで手をつないで歌を歌って、10周年をお祝いしました！！

◆実施に伴う効果

【10周年記念キャンプ】

私たちの暮らしから、自然や人との関わり体験が薄れていっている時代の中で、特に子どもたちの教育の場において、自然と共に生きていく力(実体験・感性・感受性・体力・火や道具を使い暮らしを創り出す技術や創意工夫する力など)を養う機会に恵まれていない。これからの時代を担う子どもたちにとって豊かな自然体験は必須である。ふるさと自然体験塾では、「自然と共に暮らす地域・ふるさと」を活動地とし、これまで地域の方々や講師を招いて、それらを学べる機会づくりに努めてきた。この度、10周年を迎えるにあたり、「自分たちの手で創った！自分の行動が役に立つ！」という実感と達成感をもてる機会をキャンプファイヤー場づくりや看板づくりで設けることができた。キャンプファイヤー場は、2010年より荒れた笹林や蔓を刈り取ったことにより出現した広場で、それまで森の遊び場などで利用していたが、根や石などで足元が悪い状態だった。この広場でキャンプファイヤーが行えるようになればとの夢が、今回、皆の力を合わせることによってかなった、10年目の記念とすることができた。また、参加者は楽しいキャンプ生活を通して、仲間と同じ時を分かち合い、友情を確かめ合う時間を過ごすことによって、信頼や人の温もりなどを得ることができた。

【10周年記念誌づくり】

10年の歩みをふりかえると共に、主に子どもを対象とした自然体験に携わってきた団体として、これからの自然体験について考えたいという想いがあった。そこで、「子どもと自然体験」について17名の自然体験関係者の方々に寄稿いただいた。どの寄稿文も興味深く、それぞれの指導者の人柄や自然や子どもたちに対する想いが詰まっていて読み応えがあるものであり、10周年という機会にひとつの冊子の中に掲載させていただけることに深く感謝している。また、地元の方々からこれまでにいただいてきたメッセージを一覧できるコーナーを最後に設けた。山里で暮らす人々の言葉はひとつひとつ意味深く、学びにつながる。今という時代の中での自然体験や自然と人との関わりの意味や可能性、必要性について考える機会を、この記念誌を通して多くの方につないでいきたい。

◆苦勞した点

- ・10周年記念誌を制作するにあたり、どのような企画にすれば、豊かな自然体験を子どもたちにつないでいきたいという想いを「みんなの声」によって語ることができる冊子になるかという点で苦勞した。結果、アンケート回答、寄稿文、上田町に暮らす人々のメッセージなどを合わせると、70名余りの方に関わっていただき、完成させることができた。
- ・アンケート送付の際、住所不明で届かなかった封書が三十通余りあり、転居先が分からず残念であった。

◆今後の課題・発展の方向性

- ・今回の事業では、記念誌完成までであったので、今後、どのようにこの記念誌を手渡していくかが課題として残っている。
- ・この度出来たキャンプファイヤー場や看板の維持管理が課題である。
- ・ほしはらの森でキャンプファイヤーが出来るようになり、森で過ごす魅力が増えたことにより、ますます自然体験が豊かになることが期待できる。
- ・「自然と人をつなげ、豊かな自然・ふるさとを未来の子どもたちにつなぎたい」という想いをつなぐアイテムとして、冊子(10周年記念誌)を手渡せるようになった。

◆活動を終えての感想・意見等

10周年キャンプ前に数度ボランティアスタッフが集まり、笹藪だった場所の整地や階段づくりなどを行っていました。そして、10周年キャンプの日、ようやく、みんなの汗の結晶の、手づくりキャンプファイヤー場が完成しました。夜、参加者が入場する道を、ボランティアスタッフがランタンを持って照らしてくれていました。そして、森のキャンプファイヤー場で、大人も子どもも火を囲んで、心あったかい時間を過ごしました。ああ、10年の火が燃えているなあと、感動しました。これからの10年間も、人と人、人と自然をつなぎながら、この火のように心をあたたく照らせるような場でありつづけたいと想いを新たにさせていただきました。記念行事を応援くださり、ありがとうございました。

活 動 名	団 体 名	戸河内小学校夢配達人プロジェクト 実行委員会
	地 域	広島県山県郡
	代 表 者	実行委員長 山本 慎一
	支援金額	30 万円
戸河内小学校夢配達人プロジェクト 手作り間伐材鉛筆・遊具づくり		
活動概要		
平成 24 年度夢配達人プロジェクト(主催;公益社団法人 青少年育成広島県民会議)に本町児童の「地域のひとと一緒に山に入り間伐をし、手伝ってもらって、鉛筆や遊具をつくりたい」という“夢”が採択された。児童が在籍する戸河内小学校を中心として「戸河内小学校夢配達人プロジェクト実行委員会」を立ち上げ、地元の間伐材を利用した手作りの鉛筆作りや木工遊具の製作に向けて、児童、保護者及び地域が一体となって“夢”実現に向けて取り組んだ。 平成 26 年 3 月 4 日に手づくり鉛筆の完成報告会を開催。当日は、お世話になった夢配達人の方々や地域のみなさんにこれまでの取組みを発表し、完成した鉛筆を披露した。完成した鉛筆 2,000 本のうち 400 本は、東日本大震災で被災した宮城県亶理郡山元町立坂元小学校へ戸河内小児童のメッセージを添えて贈った。 ◆実施時期 H25.6.4 間伐材伐採(安芸太田町内), H25.6.27 出前講座(戸河内小学校) H25.11.26 鉛筆板製材(河本組) H25.12.17 鉛筆製作①H26.1.31 鉛筆製作(戸河内小学校), ②H26.3.4 完成報告会(戸河内小学校) ◆参加人数 H25.6.4 30 名(5・6年生), H25.6.27 80 名(全児童 68, 地域・保護者 12) H25.11.26 30 名(5・6年生), H25.12.17 79 名(全児童 67, 地域・保護者 12) H26.1.31 82 名(全児童 67, 地域・保護者 15) H26.3.4 75 名(全児童 65, 地域・保護者 10) 参加総人員:376 名		



ヒノキを 15 本伐採



北星鉛筆株式会社「鉛筆の秘密」講演会



完成報告会



鉛筆板の木型をはずして、芯を入れ木工ボンドで接着

◆実施に伴う効果

- ・間伐材を使って鉛筆を作るといった子どもの発想が、地場産業の見直しにつながるきっかけとなった。特に本町が推進している「森林セラピー」や町観光協会「道の駅」等への商品化に向けて、今後、事務レベルで協議される予定。
- ・一つの“夢”の実現に向けて学校や保護者や地域と一緒に製作したことで、学校と保護者・地域や各サークル(女性会、郷土史研究会 等)との連携がより一層、強まった。
- ・東日本大震災で被災した学校へ手作り鉛筆を送付することをきっかけに、子どもたちは「つながり」や「きずな」といったことの大切さを学ぶことができた。

◆苦勞した点

- ・学校と地域や各サークル(女性会、郷土史研究会 等)との日程調整。
- ・間伐材伐採からスタートした事業だが、手づくり鉛筆に関する資料やノウハウがほとんどなかった。まずは、鉛筆製作工程(＝マニュアル)づくりから検討を行なったが、様々なところへ問い合わせることの連続だった。そこで、東京にある鉛筆メーカーのアドバイスや協力をいただき、地元企業と試作品を何度も作りながら、ようやく子どもたちによる手作り鉛筆が完成した。

◆今後の課題・発展の方向性

- ・今回、この事業について、独自の鉛筆製作工程(＝マニュアル)を作り上げたが、単年だけで完了するといった一過性にするのは残念であることから、事業の継続性について実行委員会内で数回ほど協議を実施。協議結果として、「実行委員会での事業は今年度で終了するが、今後は学校事業として展開する」という結論となった。
⇒今年度は「黒」と「赤」の2色を製作。今後は「7色＝虹色」が完成できるまで継続予定。
- ・また、完成した鉛筆を東日本大震災で被災した学校へ送付したが、今後も継続していく予定。そして先日、相手校から感謝状も届きこの事業をきっかけに今後も両校の新たな交流に大きな期待ができる。
- ・だが、この事業の継続性を考えた場合、予算確保が急務である。ボランティア活動にも限界があり、また、子どもたちへの経費負担軽減を考えた場合、今後も各種助成金をお願いしていく必要がある。

◆活動を終えての感想・意見等

- ・1年に渡る支援をいただき、“夢”実現ができたことに感謝申し上げます。
- ・この事業の目的でもある、「過疎化が進む地域において間伐材を通じ地場産業等を学びそして郷土愛を育む」といった学習活動に広がりを見せることができました。
- ・また、この事業をきっかけに東日本大震災で被災した小学校児童とのつながりや連帯感を持つことができました。
- ・今後もこの事業が継続できるように頑張っていきたいです。

活動名	団体名	NPO法人おおの風
	地域	広島県廿日市市
	代表者	理事長 坂 史朗
	支援金額	25 万円
よみがえれ！永慶寺川のホタルたち		
活動概要		
小学生と地域の自然大好き家族と一緒に、ホタルの育成と野遊びの会をとおして、ふるさとの自然と川の環境を地域資源として大切にしていこうとする活動 【活動内容】 ①大野東小学校の総合学習支援・ホタル学習（対象：4年生 158 名） ホタルの生態を学ぶことで、川を学び、自然環境と暮らしについても考える。そのうえで、自分たちのくらしの在り方や自然を守るための方法を考え、地域の自然とふるさとを誇りに思えるような学びの場を支援させていただく。 ②地域の子どもと保護者と野遊びの会を行う（対象：地域住民） 幼児から中学生までとその家族を対象にした自然とのふれあいの野遊びの会で自然に親しみながらふるさとの自然や川の大切さを実感し、育成する活動を行う。 ホタル育成活動は、永慶寺川の自然を守る会の会員による飼育を行った。 【特徴】 協賛団体として広島工業大学の福田ゼミ生がリーダーになって自然素材を使った遊びを考案し、「野遊びの会」で実際に主体的に指導した。また、川の生き物調査では自然観察指導員や環境サポーターが子どもたちの指導に当りました。 ◆実施時期 平成25年(2013)4月1日～平成26年(2014)3月31日 廿日市市大野地域・永慶寺川及び大野東小学校 ◆参加人数 1 ホタル教室 延べ NPO 68+先生 44+生徒 1,272=1,384 名 2 野遊びの会 延べ こども 55+54=109 名 3 AKGいいとも隊 延べ 14 名 参加総人員：延べ 1,507 名		



野遊びの会（そめん流し）



野遊びの会（自然アート）



ホタルの学習（川の生き物調査）



ホタル学習（川の様子しらべとゴミ拾い）

◆実施に伴う効果

- ①ふるさとの川や自然環境を考える子どもたちが増えた
- ②ホタルの生態について実体験を通して学ぶことができた
- ③参加された保護者も野遊びや川における安全な遊びから、子どもの発達段階における体験活動が重要ですねと感想をいただきました
- ④AKGいいとも隊のボランティア活動に多くの励みをいただきました
- ⑤地域における川の清掃活動が活発に行われるようになった
- ⑥地域の川にホタルが少しずつ戻ってきているように感じました
- ⑦ミニ・ビオトープで自然環境の中でホタルの循環ができるようになりました
- ⑧ホタルの里づくりに前向きに取り組むことができました
- ⑨ごみを捨てないことを子どもから保護者へひろがった

◆苦労した点

- ①予算は、助成金額を考慮して、効率的に使用しました
- ②学校との連携および学習の内容など順調に協議できましたが、学校行事の都合で臨機応変な変更が要求され、NPO単独の場合でもメンバーの調整に苦労しました。とくに講師のスケジュールが合わず、また、生き物調査では調査の最適期間を逃すことになり、子ども学習優先に取り組みたかった
- ③野遊びの会では、保護者の理解がとてもよく、本当に協力的でした
- ④来年以降では、野遊びの体験活動を保護者から、通年の運営を要求されました（保護者の協力があれば可能性は高い）
- ⑤地域の人からホタル学習について、無理解な言動があり苦慮しました
- ⑥地域代表の方に説明すること、学校の責任者と協議することで対応しました
- ⑦地域で、ふるさとの環境とともに子どもたちの健全育成に取り組んでいるというプライドをもっとPRしなければと考えています

◆今後の課題・発展の方向性

- ①来年も、小学校からはホタル学習をとおして、ふるさとの自然環境や川のはたらきについて学ぶ総合学習の支援を依頼されました。
- ②野遊びの会では、保護者の協力を取組んでゆけるように考えたいので、最終回にアンケート調査を行い、具体的な要望とともに将来性を考えるきっかけにしました。
- ③地域の団体(町内会など)との連携を考えてゆかねばと思っています
- ④ビオトープを造る用地の無償提供を待望していますが引き続きメッセージを出してゆきたい
- ⑤将来的には、子ども原体験や自然遊びをしながら、放課後や土日の子ども広場のような居場所づくりに発展させたい

◆活動を終えての感想・意見等

- ①通学路で会合う子どもたちから親しく声をかけられて本当に良かったと思っています
- ②小学校では、4年生から3年生に引き継ぎのような形で、グループ発表が行われ、次年度の子どもたちがホタル学習について好奇心と興味を持つように仕向けていることがとても良いので、これからも続けていってほしい(学校に要望している)
- ③地域で、クレームもありますが、ホタル学習やホタルの里づくりに少しずつ認識が広がりつつある
- ④AKGいいとも隊のボランティア活動に認識および理解が拡大しているように感じています
- ⑤ボランティアの参加をもっと、呼び掛けたい

活 動 名	団 体 名	特定非営利活動法人よもぎのアトリエ
中高校生を被災地の役に立てる人材に育てる事業:第2ステージ	地 域	広島県広島市
	代 表 者	代表理事 室本けい子
	支援金額	25 万円
活動概要	この事業は、不良や引きこもり青少年の居場所事業である『みんなが龍馬塾』の子どもたちを、東北被災地へのボランティア・学習旅行に引率したり、或いは被災地等からのゲスト講師を迎えて広島でイベントを行うことにより、東北被災地の方々に少しでもお役に立てる活動をしたり、被災地住民やそれを支援する人々との交流をとおして、東北被災地の復興に少しでも貢献する意識形成を促し、さらには東北に続いて大震災が懸念される南海トラフ地震の際に社会に貢献できる人材として育てるため行った。 ◆実施時期 夏期(平成25年8月3日～8月10日) 春期(平成26年3月20日～3月21日) ◆参加人数 夏期15名(子ども6名、大人3名、訪問先大学関係3名、被災地3名) 春期40名(子ども20名、大人20名) 参加総人員:55名	



岩手県大槌町を訪問
「いま被災地で何が必要なのか」等の説明を受ける



宮城県名取市美田園第二仮設住宅団地の
世話役のみなさんから、現状問題をうかがう



大阪府津波高潮センターで、過去の大震災や
南海トラフで想定される津波等について学ぶ



紙芝居師三橋優子さんを基町に招き、
手作りの紙芝居ワークショップ

◆実施に伴う効果

- ・25年度はテレビの地方報道番組で2度、全国報道番組で1度放送された。また、これまでの3年間(4年3カ年)で『みんなが龍馬塾』を訪れてくれた県外の方は、計 15 都道府県で延べ 100 人に及ぶ。加えて、平成25年秋からは広島県からも活動に支援していただいている。3カ年の活動成果がようやく評価をいただきはじめたと感じている。
- ・もうひとつの成果は、子どもたちの確かな成長である。3年前は、ここは確実に“非行少年と引きこもりの子どもの居場所”であった。しかし現在は違った姿を見せ始めている。引きこもりで中学へ3年間いかなかった子が、見事通信制の高校を3年で卒業でき、アルバイトもできるようになっている。親に見捨てられ家出をして高校退学した子が高校卒業程度認定資格をとろうと勉強をしている。中学時代鑑別所を体験した子が、今や大学受験を目指すまで(それも国立大学)の意識を持つようになっている。またその子につられて勉強したり、大学進学を考えるようになった子もいる。引きこもりの父親のことが心配で相談に来る親思いの高校生もいる。祖父母孝行を欠かさない子もいる。中学時代の学業はパツとしなかったが、高校へ入りアルバイトするようになってからは、アルバイト先の大人達から非常な高評価を受ける子もいる。こうした子どもたちの成長こそが一番の成果であると確信している。そしてその成長に、こうした「ボランティアツアー」体験が非常に大きく役立っていることを現場で強く感じている。可愛い子には旅をさせろというのが、空間移動を伴う異空間への旅・体験は、子どもたちに潜在する能力や感性を触発するのではないだろうか。これこそノマド・エデュケーションというべきであろう。

◆苦勞した点

- ・予算:活動には多大な出費が伴う。この助成では計上できないような細かい費用も発生する。そうした部分を賄うために通常事業に関する公的な助成を獲得するのが大きな課題である。
- ・地域の理解が乏しい。しかし25年度は地方局テレビ放送に2度、全国放送1度、計3度のテレビ放映があったことから、地域での評価は徐々に変化しつつある。
- ・しかし広島市行政からの評価は無い。同じ行政でも広島県からは評価もいただいているし、またテレビ局からの取材・報道が二度も入ったにも関わらず、市行政からのアプローチは全く無い。
- ・だからといって無理にPRすることは考えていない。これまでの3年間(4年度3カ年)で『みんなが龍馬塾』を訪れてくれた他県の方は、計 15 都道府県で延べ 100 人に及ぶ。地道な活動を続けていけば、広島市行政や広島市民の認知度も上がるものと確信している。

◆今後の課題・発展の方向性

2～3年前には“非行少年の居場所”というイメージが強かった『みんなが龍馬塾』だが、最近様変わりを始めている。それはとりわけ3月21日の街頭紙芝居会を経験して以降のことだが。塾生達が勉強する機会が増えてきたのだ。中には大学受験のことを意識する子、高校卒業程度認定試験を受験しようとする子、高校卒業のためのレポート・宿題をやらうとする子が増えてきたのだ。これまで非行や引きこもりの子は、自分の将来に対してなかなか前向きに向き合えない傾向が強いことを感じてきたが、現在は明らかに昨年までとは違う意識がどの子にも育っている。

◆活動を終えての感想・意見等

- ・『みんなが龍馬塾』で、子どもたちを連れて東北被災地に足を踏み入れたのは、これで4度目となった。その間に東北被災地の状況も移り変わって行くのが感じられる。当初は避難所や仮設住宅団地への訪問とそこでのお手伝い仕事が被災地の何処にでもあった。しかし現在はそろそろ仮設住宅から次の住いへの転居や、生活再建のための仕事探し等が被災地住民の関心の中心となっているようだ。
- ・『みんなが龍馬塾』だけでなく、全国各地の社協単位などのボランティアバスなどもまだ実施されているが、現地には「ボランティア仕事をしてくれるより、よく視察して被災地のことを他府県の住民に伝えて欲しい、或いは観光してお金を落としていくことで被災地復興面で貢献して欲しい」という声が少なくないようである。我々『みんなが龍馬塾』の被災地ツアーも、こうした空気の変化を確かに感じた。
- ・被災地でボランティアというと、社会に聞こえはいいが、もうそろそろ被災地支援、或いは被災地とのつきあい方に関しては再考すべき時に来ているものと強く感じる。
- ・津波の被害の甚大さよりも、「生活再建ということがいかに大変なことか」という現実の問題は、子どもたちにも感じられたと思われる。なぜなら『みんなが龍馬塾』に通う子どもたちの多くは、経済的困窮度の高い家庭の子である。そうした人の苦勞や痛みには苦勞を知らない子どもたちより遥かに敏感であるから。

活動名 カンナがつなぐ 平和のバトン —カンナプロジェクト—	団体名	広島市立大州小学校カンナプロジェクト
	地域	広島県広島市
	代表者	校長 藤川 照彦
	支援金額	35 万円
活動概要		
被爆後75年間は草木も生えないだろうといわれた広島に、わずか一ヶ月後に咲いたといわれるカンナの花を、自分たちの町に植えることを通して、平和について考え、行動する。 【活動内容】 ①大州小学校からマツダスタジアムまでの道沿いにカンナの花を植え、「カンナロード」をつくり、世話をする。 ②カンナの球根を育て、増やしていく。 ③平和集会・参観日・平和マラソン・歌などを通して、この活動を広める。 ◆実施時期 平成25年4月～3年計画 場所：大州小学校・大州街道・マツダスタジアム ◆参加人数 活動①147 名（日ごろの花の世話を除く） 活動②51 名 活動③約 400 名 参加総人員：598 名		



大州街道をカンナロードにしよう



プランターで広めよう



締めくくりはマツダスタジアム



ひろしま国際平和マラソン

◆実施に伴う効果

- ・児童が、「自分たちにできる平和への活動」として取り組むことができた。
- ・大州小学校の伝統として、先輩から引き継いだものを継続し、広げることができた。
- ・地域の方に、カンナの花のことや、子どもたちの取り組みを理解して頂き、たくさんの協力を得ることができた。

◆苦勞した点

- ・カンナの花のことはまだあまり知られていなかったなので、このプロジェクトの説明をし、賛同してカンナの花を植える許可を頂くまでのプロセスに時間がかかった。
- ・地域の方にご協力頂いた取り組みだったので、予定変更がなかなかきかなかった。
- ・屋外での活動になるため、天候の予測がつかず、大雨の中での取り組みをしたこともあった。
- ・今年度は頂いた予算で土などを購入できたが、来年度もこの取り組みは続くので予算的な問題が残った。
- ・カンナの花が咲くのは一時期なので、枯れた後の様子が気になる。

◆今後の課題・発展の方向性

- ・カンナロードは3年契約でお願いしてあるので、各場所の花は次の6年生が育て、新しい俳句も考える。
- ・このプロジェクトに賛同してくださる方へ、カンナプランターを届け、広めていく。
- ・カンナの球根をたくさん育て、地域の方に送り、育ててもらう。

このような活動を通して、町にカンナの花がたくさん増えていくことを考えています。

◆活動を終えての感想・意見等

子どもたちはこれまで様々な平和学習をしてきた。その中で「自分たちにできること」も色々と考えてきた。しかし、その多くは「仲良くする」「世界のことを知る」などの観念的なことだった。そこで本校では5年前から「希望の花『カンナ』」を育てることを通して平和を願う気持ちを活動に表してきた。そして今年度、マツダ財団のご協力が頂けることになり、この取り組みを校内だけでなく地域へ発信することができた。単にカンナの花を植えるだけでなく、その背景となった戦争や原爆について調べたり、世界の様子や核兵器について考えたりした。そして、色々な思いを俳句に表し、カンナの花とともに花壇に設置した。また、この取り組みには、地域の様々な方が協力して下さり、一緒に平和について考えることができたように思う。さらに、歌やマラソンなど、取り組みを広げることもできた。これを機会にこの町にカンナの花が増え、大きくなった児童たちが郷土を愛する気持ちと共にカンナの花を見てくれたらと願っている。

活 動 名	団 体 名	大朝地域資源保全隊
大朝小学校における環境学習の推進に伴う 課題解決のための実施計画再構築事業	地 域	広島県山県郡
	代 表 者	隊長 清水 昭
	支援金額	25 万円
活動概要	当団体、NPO が大朝小学校での環境学習をサポートしてきたが、人手が足りず、継続をしていくことが難しくなってきた。環境学習推進に伴う課題を解決していくこと、地域で子供を育てていくしくみづくりを考える。 ①地域全体で子供を育むための検討会(ワークショップ)の実施(8/30、3/28) ②高齢者や地域住民が参加する環境学習の実施(4/26～3/10) ③年間の環境学習の共有と住民との交流を目的とした「収穫祭」の実施(11/10) ◆実施時期 平成 25 年 4 月 26 日～平成 26 年 3 月 28 日 大朝小学校、わさ環境公園、押山農園、保田様田んぼ ◆参加人数 地域全体で子供を育むための検討会(ワークショップ)の実施 15 名 高齢者や地域住民が参加する環境学習の実施 大朝小 200 名 PTA100 名 地域 94 名 年間の環境学習の共有と住民との交流を目的とした「収穫祭」の実施 210 名 参加総人員:619 名	



菜の花刈取り



収穫祭



田植え



米販売

◆実施に伴う効果

- ・人材不足となっていた環境学習に地域の高齢者、PTA が参画するようになった。
- ・同時に頻度の多かった環境学習のカリキュラムの改善を試み、これまで同学習の運営が NPO に一任され、菜の花プロジェクトに偏っていた現状に対して、その主体を小学校側に戻し、地域環境、農業振興、多様な住民の参画を目的とした内容の修正が図られた。
- ・招待する立場になった大朝小学校の児童は、例年に比較すると保護者、地域の人が作るのではなく調理を率先して行うことができた。先生方が、児童に対しておもてなしの心の意味をよく教育されていた。

◆苦勞した点

PTA の保護者にこの授業がなぜ必要なのか、理解をしてもらうため、PTAの総会、各PTCの授業の中で説明をして理解をしていただいた。授業が必要だということは、理解してはいただいたが、平日の授業の中で、仕事を休んで行うことは、難しかった。仕事を定年された祖父母などがお手伝いしていただくことになった。地域の方には、前もって日程などが早く連絡をしていくことが、必要になるため、学期ごとの計画表の作成を急ぐようにしていかなければならない。農作業が多く、ほとんどは、天候との作業になるため、作業が順延になるとお手伝いの方が減るのが、今後の課題となるだろう。

◆今後の課題・発展の方向性

- ・来年度以降の環境学習において、新しい方向性が小学校、地域住民によって示され、地域で多様な人材が関わるようになるため、協力を地域の方などに声がけをしていく。また、児童の祖父母など関係の深い方には、理解を深めてもらうため、祖父母学級などの授業にしていけることを検討する。
- ・環境学習に多様な人材が参画する人々のマネジメントが新たに必要となった。
- ・学校から、学期ごとの計画表を保護者、地域の方にこまめに連絡をしていく。

◆活動を終えての感想・意見等

このたびのマツダ財団のご支援には、感謝しております。このような活動をしていくためには、ほんとうは、すべてがボランティアでできればよいのですが、かかる経費が多くなれば、規模を縮小したりして考えていかなければなりません。今の保護者は、ともかせぎの家庭が多く、仕事を休んで行うことが難しい。この活動を行っていくための目的の部分地域の方に理解してもらうことが、今以上に必要になってくることを実感しました。今の保護者や、先生では教えられない知恵をしっかりとこの授業をつうじて教えていくことが、将来の子供たちが生きていくための知恵になっていくことを願っています。

活動名	団体名	福山市立鞆小学校 鞆探検クラブ
	地域	広島県福山市
	代表者	校長 寺岡 美代子
	支援金額	20 万円
活動概要		
「鞆を描こう」というテーマで全校児童が、ふるさと鞆の良さを取材し、絵で表現し図録にして発表して7年目です。今回は、1000 年以上昔から栄えた鞆の町の学習素材を新たに発掘するために地域人材を積極的に導入し、「鞆探検クラブ」が鞆の良さを伝える題材をまんべんなく網羅・整理し、取材の視点を確かにして「カルタ」を作成することにしました。例年通りの図録第Ⅶ号の作成と同時に、児童の絵を絵札に、「5・7・5」句を読み札に選定します。小型カルタ 500 組だけでなく、大判カルタも作成し、児童会活動、親善交流会（41 年間続く愛知県岡崎市立井田小学校との交流）かるた大会や福祉会・保幼小交流会・地域への感謝の会など異校種・異年齢での交流の場を設定し、学びを活性化することができます。町を巡って、自分が見たこと、感じたこと、想像したこと、伝え合いたいことを絵と言葉で表わす力をつけ、鞆のよさを地域や福山市・全国に発信する活動を通して、自分の住む地域への誇りや愛着をもつことができると考えます。子どもたちに「地域への誇りや愛着」を育成する喜びを多くの人たちと実感し、共有することができるのです。 ◆実施時期 2013 年(平成 25 年)4 月～2014 年(平成 26 年)3 月 福山市鞆町内各所 福山市立鞆小学校 鞆の津ふれあいサロン ◆参加人数 鞆小学校児童 122 名 PTA80 名 教職員 16 名 福山市立大学教育学部学生 20 数名 地域ゲストティーチャー 20 数名 地域住民ボランティア数十名 鞆こども園園児 20 数名 参加総人員:約 200 名		



鞆の町の方々とグループに分かれて町歩き
ポイントを選んで句にしました



「鞆の町再発見の旅」を通じて詠んだ「5・7・5」句を
読み札にしました



「鞆の町再発見」で見つけた鞆のよさを
全校 122 名が美しい絵画に描きました



児童会行事 6 年生を送る会「カルタ会」。全校児童が
オリジナルカルタで鞆の良さを味わいました

◆実施に伴う効果

- ・児童の絵が札になっている財団支援の「まちめぐりカルタ」は、地域の「さくらホーム」や「鞆の津ふれあいサロン」の福祉活動や地域の方々の交流活動に使用したいと要望が高い。
- ・こどもたちへのアンケートで「鞆の良さを 2 つ以上答えられる」「地域の行事に進んで参加する」「鞆が好き」の回答が90%を超える。「役に立つ人になりたい」80%を超える。
- ・「鞆探検クラブ」の児童の活動への達成感が次への意欲となった。⇒「狛犬の秘密を探ろう！」
- ・完成した絵がコンクール「ふくやま子ども『生きる』美術展」学校賞・大賞等「広島県ジュニア美術展」で4割近く受賞し、外部からの評価で自信を持った。

◆苦労した点

- ・カルタ製作費の見積もりが甘かったこと
- ・地域や NPO, 大学生ボランティアなどさまざまな団体の前向きな取り組みと連携していく柔軟性をもつこと

◆今後の課題・発展の方向性

「鞆を描こう」全校絵画制作の取り組みについて、今回のように手立てを工夫して視点を変えて継承発展させていくようにする。

◆活動を終えての感想・意見等

鞆小学校の児童は、地域みなさんに支えられ豊かな経験を継続して積み重ねています。図録第Ⅶ号は児童はもちろんのこと、保護者や地域みなさんからも高い評価をいただき、完成を心待ちにしておられます。以前に作成されていた「鞆の浦いろはカルタ」は、すばらしいものでありますが忘れられた存在でもありました。今回マツダ財団様の支援でより良いもの「鞆再発見まちめぐりカルタ」として完成しました。

これから、鞆の宝として引き継いでいける青少年を育成したいです。

活動名	団体名	NPO法人いきいき農業応援し隊
	地域	広島県広島市
	代表者	代表 瀬川 徳子
	支援金額	20 万円
若年層を対象とした農業ボラバイト事業		
活動概要		
農業ボラバイト事業では、食費・交通費を程度の報酬を受取り、非農業者が農家の作業を手伝うことで、農業者の労力不足を解消すると共に都市部住民が農業に触れることを目的としている。本年度は特に若年者の参加を重視して事業を行い、広島女学院大学、広島国際大学の学生を含む 82 名の参加者により広島県内の 4 農園(三次市、北広島町、東広島市)において事業を行い、トマトの収穫、ブドウ・モモの摘果、カンキツ類の収穫などの農作業を手伝った。本事業により、農業者の労力不足を解消するだけでなく、学生が食糧生産の現場の作業や声を知ることができ、学生の成長につながる良い活動となった。 ◆実施時期 2013 年度は一年を通じて全 10 回の活動を行った。 5/12、6/23 三次市 小さな果物畑 7/7、8/13、11/23・30 北広島町 西田農園 8/17、10/20 三次市 芝床農園 2/15、3/22 東広島市 中村農園 ◆参加人数 広島女学院大学 28 名、広島国際大学 7 名、一般 16 名 いきいき農業応援し隊会員 35 名 参加総人員:86 名		



計量&袋詰め



作業



せとかを囲んで意見交換



1 年間の活動成果をまとめた冊子

◆実施に伴う効果

①参加者に対する効果

本事業への参加者の多くは、広島市を中心とした都市部の住民となっている。参加者の多くは、農作業を行うことができない環境にあり、普段目にする野菜や果物がどのように作られているのかを理解する機会は少ない。参加者からは「どのように作られているのかを初めて知った」「生産者の苦勞を知ることができた」といった声を聞いており、参加者に対する食育的效果は大きいものと考えられる。また、事業を行う中で、参加者の多くから「農作業は楽しい」という声を聞くことができた。生産者側の視点から見ると農作業は「大変なもの」というイメージだが、青空の下で多くの果実を手にする作業や、一つの畑にある野菜や果物を全て収穫する作業は、未経験のことを知る社会学習的な効果や、大きな達成感を生みだし、予想以上の「楽しい」という意見につながっていると考えられた。

②農業者に対する効果

農作業では農閑期と農繁期で繁忙の差が顕著であり、繁忙期の労力不足が顕著となる。作業には適期があり、時期を逃すと商品価値を失い多額の損失を生じることとなる。今年度はトマト、ブドウ、カンキツ類について収穫作業を行ったが、一つ一つ丁寧に行わないといけない作業に対して、多くの参加者を集めて手伝いを行ったことで、「今回の手伝いが無ければ到底、1日では終わらなかったのも助かった」という声を頂いた。特に3/22に行った清見の収穫では、総勢23名で1.5トン程度(果実1個を平均150gとして約1万個)を収穫し、生産者に対して貢献することができた。

◆苦勞した点

今年度は1年間を通じた全10回の活動に対して、のべ86名の参加者を集めることができたが、苦勞した点は参加者集め、受入先の農業者集めだった。広島女学院大学からの参加者は、ボランティアセンターに窓口になって頂いたため順調に参加者を集めることができたが、一般参加者については、募集のシステムが十分に整備できておらず、実施前に多くの労力を必要とした。現在はメールリストでの活動内容の案内と募集を行っているが、今後活動を続けて行くためには、より負担の少ない仕組みを作って行く必要があると考えている。また農業者としては今回、4件の農家のそれぞれで2回以上を受け入れて頂いたが、1回のみとならなかったことは農家にとって力となれたことを意味していると考えられ、受入農家の方から活動が評価されていると考えられる。一方で、今年度においても数件の農家からの希望があったものの実施できていない例があり、参加者、農業者双方の希望をマッチングさせるための仕組みづくりを検討して行かなければならない。

◆今後の課題・発展の方向性

今年度の活動の中で、ボラバイト事業が生産者、非農業者の双方にとって価値のある活動であることを再認識することができた。今後は活動件数を増やすと共に、安定した継続的な活動となるような仕組みを作り、活動を続けて行きたい。今後は、受入農家、参加者を増やし、消費者にとって食と農について理解を深める機会を提供するとともに、農業者の繁忙期のお手伝いを行うことで、農業生産の意欲を高めるような活動へと発展させて行きたい。

◆活動を終えての感想・意見等

本年の活動に対してご支援を頂きありがとうございました。一年間の活動を通して、参加した多くの皆様から「楽しかった」という意見を頂き、この活動の重要性を実感しています。また、活動を続けて行くための課題も見つかり、今後、この活動を長期的に続けて行くため、改善の努力を行っていこうと思います。

活 動 名	団 体 名	特定非営利活動法人 これからの学びネットワーク
探検クラブ	地 域	広島県広島市
	代 表 者	代表理事 堀江 清二
	支援金額	25 万円
活動概要		

近年、学校教育においても、子ども達が生きる力をつけるためには、「参加体験型」の学習の要素が重要であり盛んに取り上げられています。しかしながら、縦割りの科目の影響で十分にできない場合や、異学年や異なる属性の人との交流が十分にできていない場合が散見されます。そこで、社会教育の領域で「参加体験型」の学習を促進するために、2012 年から、これからの学びネットワークでは小学生の放課後学習や体験学習を定期的なクラブとして提供をはじめています。具体的には、国語をテーマにした「ブッククラブ」「ことばクラブ」、自然体験やコミュニケーションをテーマにした「探検クラブ」です。

「探検クラブ」は 2012 年 11 月から実施しており、自然の中で仲間と力を合わせて活動する「冒険教育」を通じて、子ども達が自分で考え表現する力、課題解決に立ち向かう力、コミュニケーション能力を高めることを目的とします。

◆実施時期
【前期開催日】2013 年 10 月 12 日・10 月 13 日・11 月 9 日・11 月 10 日
【後期開催日】2014 年 1 月 25 日・1 月 26 日・2 月 15 日・2 月 16 日
実施場所:広島市東区スポーツセンター周辺など

◆参加人数
参加者として広島市内の小学 3～5 年生 前期 12 名 後期 12 名
前期、後期 スタッフとして大学生各 7 名・社会人各 2 名

参加総人員:42 名



道なき道を進む力を身につけよう



コンパスを頼りに山の中を進むストレートハイク



探検家になるぞ、お～♪



ちらし

◆実施に伴う効果

全 4 回の終了後、参加者の保護者に対しては、その効果を問うヒアリングを行った。その結果、いつもは自己表現が少ない子の表現が増えてきたというものや、問題を解決するにあたり、いつもは他力本願になるところが自分で向き合おうとしていた…などといった声が聞かれた。実施にあたり、参加者と、その保護者から得た声を総合すると、今回とった下記の運営手法について、一定の評価が得られたものと考えている。

【「冒険教育」の手法の採用】

欧米などでの青少年教育でさかんに実施され、成果をあげている“冒険教育”という手法を取り入れて実施した。日本でも、古くから、“かわいい子には旅をさせよ”という言葉があるように、慣れ切った日常生活の繰り返しではなく、初めて出会う人間関係や、問題解決のための場面に向き合ったとき、子どもたちが、本気で考え、学び、他者と助け合うことの必要性が生じるように工夫されているのが冒険教育である。自然の中(非日常性)を活用して行われるチャレンジ系のプログラムの体験は、子どもたちにとっては、慣れ親しんだ自分の思考パターンや行動パターンを揺さぶられ、記憶に残るものとなったのではないと思われる。

【「体験学習法」の手法の採用】

様々な活動の体験だけをして良しとするのではなく、各活動の後に「シェアリング(わかちあい)」とよばれるグループでの内省の時間を設けていた。こうした手法は、体験学習法とよばれている手法である。同じ体験を共有し、仮に同じような「行動」をしていたグループのメンバーであっても、子どもたちは、実は十人十色の「気持ち」を抱きながら活動を行っている。目に見える「行動内容」だけでなく、そうした目に見えない「気持ち」もしっかりとわかちあったうえで、グループとしてのパフォーマンスを高め、次の活動にステップアップしていこうという学習サイクルを「探検クラブ」では繰り返していった。つまり、「体験から学ぶ」だけではなく、日常生活にも汎用できるように、「体験から“学び方を学ぶ”」場を、シェアリングを織り込むことで創りだすことをねらっていた。シェアリングで出てくる価値観には、決まった答えはない。子どもたち一人一人が、「他者の鏡に映る自分」を見て、気づきを得、新しい価値観を作り出し、元気に次の活動に向かっていけるような場づくりを、ファシリテーターとしての事前トレーニングを受けたスタッフたちが行っていく。

「人は一人では生きていけない」だけに、自分のやりたいことに向かう「自己実現の力」は、「他者を動員する」、「自分にとっての“心地よい居場所”を確保する」などのコミュニケーション能力で決まってくると言われている。「他者の鏡」を活用し、コミュニケーション力も鍛えていくこうした学びは、独学でいくら机に向き合った学習時間を増やしても、なかなか身に付かない大切な力であり、こうした手法による効果の期待は、多くの参加者の保護者が持っていた。今回はその期待に十分に応える内容が提供できたものと考えている。

◆苦勞した点

最も苦勞したのは、「冒険教育」と「体験学習法」を駆使できる「ファシリテーター型スタッフ」の養成であった。プログラム開発にあたり、下見や事前打ち合わせの手間を膨大に要した。そのための経費と時間確保のやりくりで思考錯誤を重ねた。

◆今後の課題・発展の方向性

- ・スタッフ養成
- ・さらなる参加者増
- ・プログラム運営における採算をとり、事業を持続可能なものとする。
- ・様々な問題解決場面にチャレンジしていける子どもたちを育てていくこと

◆活動を終えての感想・意見等

私たちの新しい体験活動の開発に向けて助成をいただき感謝しています。
これをステップに、より良い体験活動事業をつくりだす努力を続けていきたいと思ひます。
ありがとうございました。

活 動 名	団 体 名	ワンダー・ティーンズ(任意団体)
	地 域	広島県広島市
	代 表 者	代表理事 上野 勇葵 代表代理 山岡 亮太
	支援金額	45 万円
活動概要		
社会に不満を持ちながら、自分からは動けない青少年が多くいる中、彼らが行動できる場を提供するのが当団体です。国際交流活動を主に行い、学生がより国際問題を身近に考える機会を創出します。さらに、青少年自身がその問題を解決するために何ができるか考え、目標を設定し、その課題に対して主体的に取り組むことができるようにサポートしていきます。中高生自身が団体運営をすることで、青少年の問題解決能力を向上させます。企画から運営までを青少年だけで行い、「こどもからこどもへ」をモットーとして、青少年による交流の場を広げていきます。 ・ライブイベント 通年にわたって、広島市中区の広島市青少年センターで 4 回実施。出演者様からは出演料、お客様からは入場料をいただき、その収益は認定 NPO 法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパンに寄付をしました。手作りのイラストのポスターを積極的に作成し、積極的に広報した。出演者、参加者ともに主に高校生だったが、一部に中学生もいました。ライブイベントとあり、参加しやすかったのが要因だと思います。スタッフ、出演者合わせ、延べ 160 名ほどが参加しました。 ・文通プログラム 認定 NPO 法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパンが支援しているインドなど発展途上国の子どもたちと文通で交流するプログラムに参加しました。参加者は運営メンバー中心ですが、自らと違う立場の人と直接コミュニケーションを取ることで、より身近に子どもたちの問題にふれることができました。フラワーフェスティバルの飲食スペースではお客様にもメッセージを書いていただきました。 ・募金活動・フリーマーケット 通年に渡って天満屋広島店前、福屋八丁堀本店やそごう広島店前などの広島市中心部で募金活動を行いました。普段は運営に関わっていない外部メンバーも含めて、よりさまざまな人が参加しやすいようにフェアトレードチョコレートを配布しながら募金活動を行うなど工夫を凝らしました。 ・フラワーフェスティバル 5 月 3 日から 5 日に広島市中心部で開催されたフラワーフェスティバルにブース出展。フェアトレードの商品や食品、飲料などを販売。メンバー自身で開発した揚げアイスなども好評だった。フラワーフェスティバルは人通りが多く、多くの方にフェアトレードや高校生の活動に関心を持ってもらえた。 ◆実施時期 ・通年:ライブイベント(広島市青少年センター) ・通年:文通プログラム ・通年:募金活動・フリーマーケット ・5 月:フラワーフェスティバル ◆参加人数 フラワーフェスティバル:外部含めてスタッフ約 60 名 利用者多数 文通プログラム:10 名 ライブイベント:スタッフ、観客と出演者延べ 160 名 参加総人員:230 名		



フラワーフェスティバルにブース出展



フェアトレードの商品や食品、飲料などを販売

◆実施に伴う効果

高校生自身が自ら動くことで、メンバー自身が自らの課題や組織運用の難しさを学ぶことができた。特に、対外的な交渉は高校生としてではなく、大人と同じ責任が要求されるので、高度なマネジメント能力が要求された。高校生が自ら動く様子を見て、大学生の団体も強い関心を持っていた。

◆苦労した点

決定プロセスをどうするかを特に苦労した。誰が決定の草案を描き、決定し、その決定に対して責任を取るのかというのが非常にあいまいだったので、決定後も問題が発生した際に誰が問題解決にあたるのかということに対しても課題があった。そのため、幾度となく決定が覆されることがあった。その際は、誠実な話し合いをメンバー全体で行うよう努めた。

◆今後の課題・発展の方向性

高校生自身がいかに責任をもって活動をするか考え直す必要がある。高校生は、能力にばらつきがあるので、特定のメンバーに頼る傾向があるが、一人に頼って団体運営を行った場合、その一人が不在時にどう問題を解決するかなど、課題を残した。

◆活動を終えての感想・意見等

活動を行うことでカフェの経営の仕方であったり、どんなふうに宣伝していけば多くの人に買ってもらえるのかなどの社会経験を多く積むことができました。また、この活動を通して多くの人と関わることができ、これからの社会に生かせる経験ができました。

活 動 名	団 体 名	こどなひろば中国支部
子どもと大人の世代を越えたディスカッションイベント「こどなひろば」の開催	地 域	広島県広島市
	代 表 者	2013 年度代表 吉崎 友貴
	支援金額	10 万円
活動概要	団体創設者が電車の中で聞いた「高校生は何も考えていなくて楽だよね」という言葉。世代が違えば、お互いに対する偏見を持ってしまったり、世代間の価値観のずれが生じてきたりするものだと思います。これらの問題の緩和を図るために、私たちは、子供と大人の対話の場を設けるディスカッションイベントを年中通して開催しました。 こどなひろばは、現在全国に 5 つ支部があり、それぞれの支部が独立した活動を行っております。こどなひろば中国支部も、他の支部も、メンバーがすべて高校生で構成されており、イベントは企画、運営において、高校生が主体となっていきました。様々な方の指導、協力をいただき、盛大にイベントを開催することができました。 世代が違えども、子供も大人も一人の人として接する。そのような世界を作ることができれば、双方の意見が反映された社会づくりをより実現可能なものにし、地域の連帯をより強固なものにできると信じています。 ◆実施時期 ①2013 年 6 月 23 日 広島アステールプラザ 大会議室 ②2013 年 8 月 11 日 南区民文化センター大広間 ③2014 年 3 月 30 日 広島青少年センター 集会室 3 ◆参加人数 ①40 名 ②11 名 ③37 名 参加総人員:88 名	



ディスカッションの成果



第 1 回イベントの様子



第 3 回イベントの様子



第 3 回イベント 集合写真

◆実施に伴う効果

・Hiroshima Future Center(HFC) さんとの協力関係の形成。

こどなひろばを一年間続けていくに当たり、様々な人と出会っていくなかで、Hiroshima Future Center さんというこどなひろばとよく似た理念を持つ団体を発見しました。3 月に行った第三回目のイベントにおいては、広報という形でのご協力をしていただきました。これからは、共催を一緒にしたいという話も出てきています。

様々な形でお互いがサポートし、切磋琢磨し合えるような環境づくりをこれから目指していきたいと思っています。地域連帯を図る団体同士のコネクションを持つことができたことで、この分野の活動が活発になっているように見受けられます。

・参加者個人に与えた影響

この一年間を通しのべ 87 人の参加者の方々が、活発な対話を行っていました。中には、大人と子供でまったく赤の他人だったはずの二人が、意気投合をしメールアドレスを交換している場面だったり、参加者同士が最後に握手を交わし合っている場面があり、参加者の方々にイベントから持ち帰るものがあったのだなと実感しました。

最近の若者はすごいな。負けてられない。と真剣に呟いていた大人の参加者の方もいらっしゃいましたし、「このイベントが俺の人生を変えてくれたよ」と私たちに話してくれた若者もありました。このイベントが参加者の自己啓発となり、また、世代に対する認識を変えていることを感じられて、ほっとしました。

◆苦勞した点

広島市内ではあるものの、運営メンバーがそれぞれ違う高等学校に通っているため、ミーティングで全員が集まるのが滅多にありませんでした。人によれば、部活、学習塾の関係上、調整できる時間がほとんどない人もいました。そのため、団体の中の情報共有を一貫して高レベルで維持し、団体を一つにして動くということがなかなかできませんでした。

そのため、特にイベントのカラーやディスカッションのテーマを企画する段階において、運営メンバー全員の意見を聞くことができず、イベントの企画に時間がかかった時期もありました。

高校生であり、大人の広報にも少し苦勞はしましたが、Facebook ページなど、ネットの活用や、新聞取材、ラジオ広報など、様々な広報を展開することによって、少しずつ参加者層が増えていったので、最終的には乗り切ることができました。協力していただいた団体、及び、個人の方々に感謝を述べたいと思います。

◆今後の課題・発展の方向性

高校生活は三年間しかないため、高校生団体という運営のカラーを続けていく際、団体の新旧交代が著しく起こってしまうのが今後の課題でもあります。現に、2013 年度の 12 名のメンバーのうち、9 名は高 3 に上がるとともに、受験を控えるという理由で運営から離脱をしていきました。こどなひろばをこれからずっと継承していき、より多くの人々に世代間交流を行ってもらうためには、こどなひろば OBOG 会を作るなど、今までにないサポートの形態が必要不可欠になってくるように感じました。

こどなひろばは 2014 年度になっても、「世代を超えて、自由に対話する」をモットーに、ディスカッションイベントを続けていきたいと思っています。これからは、こどなひろばのイベントに参加される参加者数や、年代の幅を広げていけるように精進していきたいと思っています。

◆活動を終えての感想・意見等

マツダ財団様のご支援のおかげで、準備にかかる代金の負担を極限まで減らすことができました。そして、それ故にイベントをすべて無料で行うことができました。また、マツダ財団様に限らず、ご指導、ご協力をしてくださった、すべての方々に感謝を述べたいと思います。

子供と大人の両者がわかりあうことができれば、もっと良い社会になるはずです。私たちの活動は誠に小さなものですが、地域連帯を目指す私たちのような活動の輪が増えていくことを願っております。

活動名	団体名	特定非営利活動法人NPO狩留家
	地域	広島県広島市
	代表者	理事長 黒川 章男
	支援金額	25 万円
子ども中心の伝統芸能“狩留家シャギリ”の復活		
活動概要		
30 年途絶えていた狩留家の伝統芸能シャギリを復活させるために、24 年度から町内で呼びかけを始めていました。しかし、お金がなく、なかなか前に進めませんでしたが、助成金を頂くことになり、復活への住民の動きが活発になりました。どうも有難うございます。 ①シャギリの復活保存の為に組織を立ち上げる ②シャギリを伝える 8mmフィルムをDVDに編集し、シャギリの全貌を知ると共に、後世に伝えるために保存する ③シャギリに必要な邦楽器の演奏者を掘り起し、練習を積む ④シャギリに必要な服装や飾り物などを調べ、必要な物を整えていく ⑤シャギリ再演の時期を設定し、それに向かって練習を積む ◆実施時期 平成 25 年 毎月 1 回 狩留家集会所、夢かるが ◆参加人数 NPO狩留家理事 18 名、狩留家シャギリ保存振興会理事 33 名 三味線 11 名、太鼓 13 名、踊り 8 名 参加総人員:270 名		



三味線の太鼓を 30 年ぶりに修理



シャギリ用の締め太鼓を購入



三味線練習風景



シャギリ踊り練習風景

◆実施に伴う効果

- ①シャガリを実施するには、三味線、鉦、太鼓、歌、踊りが一体となった演出が必要です。第一に、邦楽器の音符、踊りの原型の再現などが必要で、狩留家の皆さんに聞き合わせ、音符、歌本を一式そろえることが出来ました。しかし、踊りの形、衣裳・持ち物などは判然としませんでした。
- ②マツダ財団からの助成金を頂くことになり、先ず 30 年前の 8mm フィルムを DVD に編集し、機会を見つけて多くの住民に放映しました。そのことによって、急に狩留家町内のシャガリ復活ムードが高揚しました。
- ③上記のように、DVD を再生することによってシャガリ復活に対する思いが大きくなり、「会則」の手直し、練習の始まりと言うように前に進むことが出来ました。ありがとうございました。

◆苦勞した点

- ①先ずは、シャガリがどのようなものか知っている人が少なくなってきたので、すぐに再現は不可能であった。
- ②30 年前のシャガリ実演の 8mm フィルムの所在もなかなか分からなかった。
- ③三味線の復活、取組のメンバーの足並みが揃い難かった。
- ④住民に対して、シャガリ復活・保存の PR のために、敬老祝賀会、狩留家三社祭りの日（体育の日）に高齢者や、子ども・保護者に 30 年前のシャガリの興業の様子を放映した。
- ⑤現在、鉦・太鼓の部、三味線の部（経験者グループ・初心者グループ）、踊りの部、それぞれが活動日を決めて練習をしています。

◆今後の課題・発展の方向性

- ①今までは踊り手は全て女性であったが、少子高齢化の為、特に女性の児童については、狩留家町内人口では全員参加しても 20～30 人程度で、シャガリの踊りの行列人数としては少なすぎる。対策として、狩留家町内の女子だけでなく、a 親戚縁者にも参画を呼び掛ける。b 狩留家の近隣地域の方々にも参画を呼び掛ける。c 踊り手を女性に限定しないで幼児の男子も加える。
- ②今までは、各個人で衣裳をそろえていたが、浴衣や着物を縫える人が少なくなってきたので、外注、オーダーしなければ踊りの衣装の統制が取れなくなってきた。
- ③26 年度には最低限、狩留家町内での演出が実施できるようにする。
- ④27 年度に向けて、広島市のフラワーフェスティバルに出演できるまでに練習を積んでいきたい。

◆活動を終えての感想・意見等

- ①狩留家の良き時代・江戸時代に狩留家が繁栄した要因は、a 水車での搾油産業、b 三篠川舟運事業、c 狩留家に庶務代官所（現在の区役所役割）、d 郷土芸能シャガリの存在などがあげられます。
- ②別途事業として、狩留家に「水車」が一基できました。
- ③助成金を頂き、シャガリ実演の最低基盤の道具がほぼ揃い、三味線や太鼓の練習も始まりました。今年、狩留家は、シャガリの復活元年となります。
- ④マツダ財団さんの助成金による一押しが、足を一歩前に出す力となりました。ありがとうございました。是非 26 年度には、シャガリ実演を成し遂げたいです。

活 動 名	団 体 名	府中町災害ボランティア赤十字奉仕団
	地 域	広島県安芸郡
災害時、まず「いのちを自分で守る～自助～」	代 表 者	委員長 篠永 廣也
	支援金額	10 万円
活動概要	幼児から高齢者までを対象にした、防災教育を下記防災ゲームで活動しました。 ①「防災ダック」は幼稚園児対象で、安心・安全の「最初の第一歩」を実際に身体を動かし、声を出して遊びながら学んでもらうゲームです。 ②「防災すごろく」は小学生から高齢者対象まで、問題に対して三択一正解どれだ・・・？で、答えが用意されており正解するとサイコロを振って、出た目の数だけコマを進めるゲームです。(笑顔で声を出し楽しみながら防災知識を習得します) ③防災ゲーム「クロスロード」は問題に対し、イエス・ノーの決定を行う。全員が自らの決定の理由・根拠を話す。解説ポイントの後、再度イエス・ノーの決定を行う。 ④その他行事 AEDの体験講座・各町内会の図上訓練・北部町内会の避難訓練 ⑤定例会は、毎月第三木曜日に実施。 ◆実施時期 2013年4月1日～2014年3月31日 府中町ふれあい福祉センター・老人福祉センター福寿館(隣接)・南交流センター 日本赤十字広島支部・つばめ幼稚園・熊野小学校 他 ◆参加人数 ①防災ダックのゲーム 161 名 ②防災すごろくのゲーム 290 名 ③クロスロード他 505 名 参加総人員:956 名	



「防災ダック」の教材として、動物の被り物を作成



「防災ダック」ゲームの風景



「防災すごろく」ゲーム

◆実施に伴う効果

- ①「防災ダック」ゲームは、防災や日常の危険から身を守る事を学ぶカードだけでなく、挨拶やマナーといった日常の習慣についても学べるカードもあり好評でした。今後は、親子と一緒に参加する行事で活動します。
- ②「防災すごろく」ゲームは、参加者からは好評でしたが、小中学生対象の参加者が計画より少なく残念でした。学校内での行事ができなかったが、これからも積極的に取組めます。
- ③「クロスロード」ゲームは、地域住民を対象にした防災ゲームでしたので、各地域内での活動を今後も推進します。

◆苦勞した点

- ①幼稚園・小中学生対象の活動計画は、私達のPR不足か？当初予定数の出前講座が出来ませんでした。幼稚園・学校に訪問し依頼したり、教育委員会にも訪問、書面等で依頼するも良い回答がありませんでした。→次年度も継続的に依頼します。
- ②町内は南交流センターの協力がありました、又町外からの申込みもあり良かったです。
- ③「防災すごろく」の活動には、参加者の年齢層等で、新しい内容の問題に切り替えながら、対応しています。

◆今後の課題・発展の方向性

これからの地域社会にあっては、青少年の育成に私達ボランティアの役割も必要だと思います。今後は南海トラフ地震対策の減災支援として、幼稚園児・小中学生に防災時の知識の理解を深めながら応援対応します。

共催企画として公民館・消防本部等の協力を得て活動を進めたいと考えています。行政・教育委員会と話し合い、学校の放課後時間帯に、学生に防災知識の勉強会が出来る様立案書を提出します。(学校内の行事であれば参加者が増加すると思います)

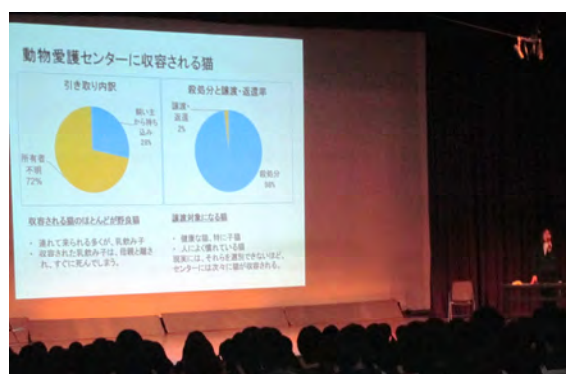
◆活動を終えての感想・意見等

- ①防災関連の研修・勉強会等に参加し、会員の資質面が強化されました、有難うございます。
- ②活動面では、幼稚園児・小中学生の出前講座が予定を下回りましたが、26年度に繰越継続で対応致しますので、ご配慮の程宜しくお願い致します。
- ③マツダ財団のお蔭で、当団体は幅広く地域社会に役立つ行事の活動にも、積極的に取り組む姿勢が出てきました。

活 動 名	団 体 名	特定非営利活動法人 SPICA
	地 域	広島県広島市
	代 表 者	代表 山下 育美
	支援金額	25 万円
いのちの教室		
活動概要		
「いのちの教室」は、犬猫の殺処分の問題を通して、中学・高校生に改めて「命」について考えさせる講義とワークショップである。 前半では、動物愛護センターでボランティア活動をする講師が、日本における犬猫の殺処分の現状と動物を取り巻く環境の問題点、そしてボランティア活動を行う上で大切なことなどを、具体例を用いて説明する。 後半のワークショップでは、グループで話し合い、殺処分をなくすための解決策を考え出す。その際、生徒たち自身が、どのようにその活動に関わることができるかを考えさせることによって、ボランティア活動に積極的に参加し、毎日の生活の中でも社会貢献を意識できるような生徒を育てたい。 ◆実施時期 平成 25 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日 広島県内の中学・高等学校 ◆参加人数 進徳女子高等学校 希望生徒 11 名と教員 2 名 比治山女子中学・高等学校 929 名 広島市立船越中学校 中学 1 年生 67 名と教員 4 名 いぬ・ねこフェスタ(アニマルケア専門学校)20 名 参加総人員:1,033 名		



アニマルケア専門学校のイベント風景(一般向け)



講義風景(殺処分の多さに愕然とする生徒)



講師への質問(船越中学校)



講義風景(比治山女子中学校全校生徒)

◆実施に伴う効果

進徳女子高等学校、比治山女子中学・高等学校、広島市立船越中学校の生徒には、後日、アンケートと感想文を書いてもらった。アンケート結果によると、参加した生徒の 89.8%が「参加してとてもよかった」と答え、「まあまあよかった」と合わせると、99.9%が「よかった」と答えた。講義内容についても、約60%が「ほとんど知らなかった」と答え、多くの生徒が感想文で、「現実を知るとは辛かったが、知ることができて良かった」「これまで無関心だった自分を反省した」と記入し、当事業の最大の目的である「知ること」の大切さを実感してくれた。また、「今後、動物愛護センターでのボランティア活動に参加したい」と答えた生徒は 64%と高く、感想文にも「ぜひ参加したい」と記入した生徒が多く見られ、積極的なボランティア活動と社会貢献を促す事ができたといえる。

◆苦労した点

「いのちの教室」の受け入れ校を探すことに苦労した。学校訪問をして趣旨や講義内容を説明すると、多くの先生が共感してくれるが、学年や学校としてまとまった時間を取りにくいなどの理由で、断られることが多くあった。今後は、学校全体のカリキュラムに入りやすいように、早い段階での学校訪問をしようと考えている。また、カリキュラムに入りにくかったことから、当初予定していたワークショップを開くことができなかった。生徒から直接質問や意見を聞く時間が持てなかったことは、大きな反省点でもある。一度きりの講義ではなく、継続的に、生徒たちが参加できるプログラムを用意していきたい。

◆今後の課題・発展の方向性

今年度実施した学校の生徒たちの多くが、アンケートで「ボランティア活動に参加したい」と答えてくれた。しかし、中学生・高校生が自分たちだけで行動するのは難しいようだ。今後は、SPICA として、中学生・高校生が積極的にボランティア活動に参加できるシステムを組み立てたいと考えている。現時点では、広島市動物愛護センターでの譲渡犬の散歩ボランティア、呉市動物愛護センターでの体験ボランティア、西区観音にあるピースワンコ・ジャパンさんの譲渡センターでの犬の散歩ボランティアを候補と考えている。

また、「いのちの教室」の内容を学校での道徳教育などで発展させてもらい、文化祭での展示や舞台発表などにも役立ててもらえるような仕組みも構築したい。

◆活動を終えての感想・意見等

今年度、延べ 1000 人以上の方に、この「いのちの教室」を聞いてもらうことが出来ました。殺処分という、できれば目をそむけたい現実をお伝えしましたが、みなさん一様に「聞いてよかった」と答えてくれました。現実を知ることの大切さ、そして知った上で自分に何ができるかをしっかりと考えてもらえたと思っています。

生徒たちが書いてくれた感想文は全て読みましたが、その多くは B5 版にびっしりと真剣な思いが綴られていました。ペットを飼っている生徒も多かったようで、自分の飼っている犬や猫のことを思い、涙が止まらない生徒もいたようでした。しかし同時に、「ペットを飼ったことがないけれど、これから飼うときには動物愛護センターから引き取りたい」とか「(アレルギーなどで)ペットは飼えないが、動物たちがこんな状態におかれていることは許せない」といった意見が多かったことは意外な反応でした。これは、「いのちの教室」が、単に「犬や猫がかわいい」というだけでなく、「いのち」そのものについて考える契機になったことを表していると思います。

また、この「いのちの教室」は、現在の学校教育に絶対に必要なプログラムであるという自信はありましたが、なかなか動物愛護の NPO 団体というだけで、学校に受け入れてもらうことは難しかったと思います。しかし、マツダ財団様より支援を受けていることを学校に伝えることにより、「それならば安心です」と、信頼してもらうことができました。助成金をいただけたことはもちろんですが、マツダ財団の支援を受けているという事実は、この活動の社会的な信頼性を高め、根底の部分で大きな支えとなったと思っています。本当にありがとうございました。

活動名	団体名	福島と広島をつなぐ会
	地域	広島県広島市
	代表者	会長 叶堂 恵子
	支援金額	25 万円
活動概要		
福島第1原発事故で被災した福島県川俣町の子供たちのフォルクローレ演奏グループ「アミーゴ・デ・川俣」(齋藤 寛幸代表)14人を広島に招き広島の子供たちとの共演コンサートを行い交流を深める。コンサートでは、最初に齋藤代表が、「川俣町の復興へ向けての軌跡」と題して講演、「アミーゴ・デ・川俣」の子ども14人がケーナなどでフォルクローレ演奏を、広島市内からは安田小学校器楽部が歌や器楽演奏、なぎさ公園小学校「ドラム・コー」が和太鼓の演奏、広島少年合唱隊が復興をテーマにした歌でハーモニーを響かせる。また安田小学校は復興の象徴であるカンナを贈呈する。川俣町はフォルクローレが盛んで子供たちは4年生からケーナを授業で学習する。川俣町は計画的避難区域の南部「山木屋地区」を持ち、全村避難を余儀なくされた「飯館村」のとなりである。除染も進まず未だに外での活動の制約がある地域である。両県の子供たちが社会的な見聞を広げ、お互い頑張る姿を見ることで、優しく前向きに生きる心を培う。 ◆実施時期 2013年7月27日(土)13:30～15:30 アステールプラザ中ホール ◆参加人数 一般観客224名 共演学校、団体72名、スタッフとボランティア33名		
参加総人員:329名		



「復興の象徴」カンナの贈呈式
安田小学校から「アミーゴ・デ・川俣」の皆さんへ



フィナーレ「歩こう」を参加者と会場の皆さんで
大合唱



コンサート終了後、会場出口で観客をお見送りする
「アミーゴ・デ・川俣」



「アミーゴ・デ・川俣」のフォルクローレ演奏

◆実施に伴う効果

- (1)「アミーゴ・デ・川俣」の斎藤氏より感謝の手紙をいただきました。その中から。「(川俣の子供たちは)広島から帰って以前より数段元気にそして大人になった気がします。」(広島の皆さんの)気持ちが子供たちに伝わり、その気持ちを忘れることなく感謝の気持ちを持って育ってほしいと願っております。」「今回広島に行った子供たちが同じ年齢になった頃、広島の子供たちを、美しくなった福島に、コスキン・エン・ハボンに招待してくれることを願っております」「これからもいつまでも忘れることなくお付き合いをしていただきたいと存じます。」以上のように川俣町との信頼関係ができたと思います。
- (2)夢コンサートの観客アンケート・・・子供たちの健気な歌声、力強く美しい演奏、一生懸命な震災に
いを向けた取り組み、これらが観客の心を動かし、人々の心に暖かい灯がともるようなコンサートとなり、日本社会に希望を持つという感想に結びついたのだと思います。人と人がつながることの素晴らしさ、両県の子供たちが頑張る姿を見てここから思いやりの心や前向きな気持ちが出てきて未来に夢をつなげたと思います。

◆苦勞した点

- ・音楽を通じでの支援ということで1年8ヶ月かけて3回ホールでのコンサートを行い、寄付金を呼びかけたり、資金を集めてきました。結果としてPRはできたようですが、コンサート集客などに多大の労力と時間をかけても、目標額は集まらず、助成金申請に切り替えました。不慣れなために助成金申請も時間をかけ苦勞しました。
- ・震災という大きなテーマですがこれに関わっていこうという人達は少ないだけでなく、関わった人達も心が揺れ動いているようでした。協力してくれている人たちは長年の音楽を通してできた関係の人たちが多く、それ以外の人たちが寄付をしてくれたりというのは長い間頑張っても増えませんでした。
- ・集客をするため、各学校への配布、新聞社、情報誌、ミニコミ、放送局、あらゆる手段を投じましたが、時も経ったのもあるでしょうが集客の結果を見てみると関心の低さを痛感しました。

◆今後の課題・発展の方向性

- ・今回できた川俣町とのつながりを大切に、放射能に不安を持つ人たちが何を望むかを考えながら、新たな目標を設置して、計画を立てたいと思っています。
- ・今回参加した子供たちの成長も見守りたい。
- ・いずれにしても音楽の力というのはとても大きいと思いますので、それを生かした活動をしていきたいと思っています。

◆活動を終えての感想・意見等

最後の最後で報われました。人と人が音楽でつながりました。達成感があります。苦勞した甲斐がありました。マツダ財団さんには信頼していただき、ありがとうございました。気持ちよく助成金を使わせていただきました。

活 動 名	団 体 名 呉市市民公益活動団体Team JIN「仁」
震災移住親子と仲良く学ぶ魚魚(とと)教室	地 域 広島県 呉市
	代 表 者 代表 平中 哲朗
活動概要	支援金額 35 万円
東日本大震災発生に伴い広島県に移住された方の中には、未就学児や園児・児童を抱えたうえ、地縁者がおられない親子が、少なからずおられます。 また、移住者の保護者におかれては、子どもが移住先の子供たちと仲良くできるのか、さらに、移住先の食文化になじめるのか、等々、悩みが尽きません。 こうしたことから、瀬戸内海の水産物を対象にした水産教室を開催し、瀬戸内海の水産物の豊かさを実感していただくとともに、移住先地域の親子との交流の促進を図ることで、震災移住親子の不安解消につなげる活動とします。 ◆実施時期、参加人数 第1回(タチウオ編):2013年6月15日(土)/豊浜漁民センターふれあい 40名(22名/親子、17名/スタッフ) 第2回(チリメン編):2013年10月13日(日)/阿賀公民館 44名(27名/親子、17名/スタッフ) 第3回(アカシタビラメ編):2013年12月8日(日)/阿賀公民館 40名(25名/親子、15名/スタッフ) 第4回(カキ編):2014年1月18日(土)/安浦公民館 47名(25名/親子、22名/スタッフ) 参加総人員:71名	



養殖業者さんよりカキ打ちの方法を学ぶ



サポーター、漁協の皆さんと、
美味しく、楽しいお食事タイム



チリメンモンスターみい〜つけたっ！！



おさかなニックネームを前に、
今日は、どのお魚を食べようかなあ〜

◆実施に伴う効果

今般の活動は、低年齢層の魚離れが顕著で、水産物の消費が低迷している状況の下開催されたが、

1. 子どもたちやその保護者が、瀬戸内海(地元)で獲れるおさかなの美味しさを実感
2. おさかなに直接触れたり、ニックネームを考えることでおさかなに親しみを感じ
3. 漁業現場や加工場等の見学、また、てんぷらづくり等、貴重な体験を得る
4. ニックネームで販売されているスーパーの店頭で足を運ぶ

こうしたことにより、おさかなに関する知識を得たうえ、地元・郷土料理や創作料理を美味しくいただくこと瀬戸内海(地元)のおさかなについての関心が増進したと思われる。

また、チリメンモンスター探しや、てんぷらづくりでは、初対面の子どもたちがお互いを思いやりながら取り組む様子が見え、和やかな雰囲気の中、交友を深めることができた。保護者間においては、お互いの地域(移住元・移住先)のおさかな事情や食文化に関する情報交換を図りつつ、ママ友関係の親交を深めることができた。さらに、日常、子どもたちが足を運ぶ機会の少ない漁業現場やスーパーの鮮魚売場が、子どもたちでにぎわうことで、漁業関係者やスーパー関係者より活動の継続に期待を寄せられた。

◆苦労した点

東日本大震災に端を発して移住されたご家族、特に園児・児童を抱えられた保護者においては、多様な課題や多岐に亘る悩みを抱えておられ、とりわけ食に関しては、安心・安全への関心・不安が高じているようです。

こうした中、活動を推進する主催者としては、地元のおさかなが安全で、安心して召し上がっていただくことができるよう、魚魚(とと)教室を通じて理解していただかなければならず、そのための活動内容の企画には腐心したところです。

幸い、地元の漁業関係者、スーパーのご協力を得ることができ、また、歴史ある水産加工業者より支援を賜り、さらに、近隣高校の先生や生徒、広島大学の学生ボランティア OPERATION つながりよりボランティア支援いただき、運営体制は、円滑に構築できました。

しかしながら、移住者の親子の参加者は、呉市社会福祉協議会やひろしま避難者の会アスチカのご協力を仰ぎ、魚魚(とと)教室開催の案内チラシを送付いただき募集しましたが、残念ながら想定していた人数には至りませんでした。

◆今後の課題・発展の方向性

今般の活動のように食を通じた移住者支援活動については、地域の食文化や食習慣、あるいは嗜好の違い等があることに配慮したうえ、移住先の食についての知識を深めてもらい、結果として安心した食生活が送れるようになることが目的であることから、食材は多様に取り扱い、また、料理については、子どもたちの好みに合わせたりする工夫も必要と推察されます。

こうしたことから、水産物をテーマに開催する場合においては、水産物の旬の時期や扱う水産物の選定に配慮しつつ、定期的、かつ継続的に開催し、より多くの水産物に触れる機会を設けることが肝要と思われます。

また、今後は、移住先のおさかなについて学習するばかりではなく、移住者の方々より、移住元の食文化について伺う機会を設ける等、交流に深みが増すようなプログラムの検討も要します。

低年齢層の水産物への関心が低下し、水産物の消費が低迷する現状においては、地元水産物が豊かで美味しい、ということを実感できるよう、水産物に触れ、味わう機会を創出するため、さらに地域の漁業関係者との連携を深め、行政の支援を仰ぎながら、地域が一体となって取り組む活動への昇華を図ることとしたい。

◆活動を終えての感想・意見等

今般の魚魚(とと)教室に参加された子どもたちの探究心はとても旺盛で、てんぷらづくりやカキ打ち体験には熱心に取り組み、また、漁業現場や工場見学では歓声を上げながら観察していました。

特に印象的だったのは、漁協の婦人部の方や料理研究家が創作、調理したおさかな料理を、骨があるのも厭わず、きれいに平らげ「美味しい、美味しい」と喜んでいました。参加した子どもたちに魚離れなどありはしないと、感じたほどです。美味しいお魚料理を食べることができれば、初対面の子どもとおしの会話も弾み、保護者の方々も親交を深めることができると実感した次第です。次回開催が待ち遠しいほどです。

活 動 名	団 体 名	ほんわかプロジェクト応援団
学生ボランティア「ほんわかプロジェクト」による、 積雪地の高齢者宅等での除雪及び島しょ部での 柑橘農家の支援	地 域	広島県東広島市
	代 表 者	広島大学 名誉教授（比治山大学教授） 石井 眞治
	支援金額	25 万円
活動概要	広島の大学生を中心に活動範囲を広くするボランティアグループを編成し、その活動を支援し、地域との交流で学生達のコミュニケーション力も伸ばす目的で、応援団をつくって活動している。2013 年度は、離島の柑橘農家での手伝いや、県西北部の田植え行事に参加して、柑橘栽培や米作りに関する知識と体験を得るとともに、地域の方々との交流も行なった。ただ、活動計画の冒頭に掲げた「積雪地での除雪作業」は、この冬の降雪量が少なかったため直前に出動を中止するに至った。 ◆実施時期 期間:2013 年 5 月から 2014 年 3 月の間 場所:大崎上島町、安芸太田町（庄原市での活動は今冬の積雪が少なく中止した） ◆参加人数 大学生 97 名 社会人 26 名 地域の方 110 名以上(交流会は人数の 1/4 程度を計上) 参加総人員:233 名	



柑橘(ハッサク)の蕾を枝からはずす作業
5 月 (大崎上島町)



摘み取ったミカン(いしじ)を選果場に運ぶ
12 月 (大崎上島町)



花田植交流会
5 月 (安芸太田町 殿賀)



雨で中止の田植え
「せっかく来てくれたから」と手植え体験

◆実施に伴う効果

先ず、参加した学生の旺盛な好奇心とひたむきに作業を行う熱心さに、指導をしてくださる農家が感心され、熱心な指導に加え、次回の実習を楽しみにしてもらう程の高い評価を得た。2014 年度も継続する。また田植え体験については、「“花田植え”行事と重ねたい」との地元の要請に沿う形となり、好印象のためか、「翌年は主催地区として招待したい」との表明がなされ、2014 年も出向いて交流する予定である。これら2つの活動とも、参加した学生達には食料生産を考える良い刺激となったほか、地元の方達が町外の人々にも視点を向ける契機となったと喜ばれた。

◆苦勞した点

個別の農家や個人宅に直接交渉をするのではなく、役場及び地元の NPO や自治振興区の代表者に相談と要請をする方法を選んだ。
日頃から関わりのある地域であることや、数年前からの活動でもあり、加えて若者達の思いにとっても理解のある役場職員や地域の方であったため、調整役としての苦勞はなかった。
また、柑橘農家での作業については、学生の代表が農園主と相談して作業日を決める運びとしたため、より良い意思疎通と気運の醸成に至ったと思う。

◆今後の課題・発展の方向性

若者、特に学生の場合、活動の趣意や熱意を好ましい方向で継承できるか…。という課題が“不安”に似た形で存在する。
実地参加した場合には、ほぼ大多数が好印象を得ることができるので、学生であれば年次を混在させて構成することや、常に新しい参加者を歓迎する姿勢が必要だと思う。
また雪かきボランティアに行く際は、地域で支援して下さる方の家にも等しく積もる雪の問題であり、地域での調整に負担を少なくする努力も必要だと思う。けれども難しい…。
大崎上島町での活動や安芸太田町での交流については、地元の温かな応援もあり、力量に見合う規模で 2014 年も続けてゆく。

◆活動を終えての感想・意見等

「雪かきボランティア」を積雪が少ないため中止した。現地に用意した道具類はひと冬待機することになるが、地元の方達の生活には好都合であり、“残念”という言葉は厳に慎む。しかし、参加者にとっては鮮明な印象と強い自己肯定感を得る、絶好の研さんの機会になる。この種のボランティアは、離れた地域でも必要としている所に出向く姿勢だが、現実には学生達が大学を休みにくい修学環境になりつつあり、注目を集める大災害は別として、地味な活動への理解の差が現れる。

活動名	団体名	日本ボーイスカウト山口県連盟山口第3団
	地域	山口県山口市
	代表者	団委員長 松永 正巳
	支援金額	25 万円
活動概要		
ボーイスカウトは野外活動や奉仕を通じて青少年育成活動を展開している。平成 25 年 8 月に山口市において第 16 回日本ジャンボリーが開催された。このジャンボリーは全国から 13,000 人、海外から 1,500 人のボーイスカウトが集まり交流や体験を通じて友情や国際感覚が身に付き、青少年の成長が期待される我が国のスカウト運動の最大の教育イベントである。こども達は長期間 8 泊 9 日のキャンプ生活で協力することの重要性を学び、他県、各国との友情を育み、また平和について考えるプログラムなどで、大きく成長することができた。 ◆実施時期 平成 25 年 7 月 31 日～8 月 8 日 山口県山口市阿知須 きらら浜 ◆参加人数 山口第 4 隊として、萩市、山口市(山口第 3 団)、防府市のスカウト 34 名、リーダー 6 名が参加 参加総人員:40 名		



台湾スカウトとの交流



キャンプでの食事風景



嵐の後片付けを海外スカウトと



日本中、世界中のスカウトとショーを楽しむ

◆実施に伴う効果

地元山口市で実施された日本ジャンボリーでは、初めての試みとして山口市内の学校訪問等も実施され、地元の子ども達も海外スカウトとの交流で多いに国際感覚を養えたと思う。
我隊のスカウトも会場内で海外スカウトとの交流(特に台湾)を通じ、国際感覚の高揚につながった。また、山口県や山口市の支援もあって、ボーイスカウトへの新規入隊者も増え、低下傾向であったボーイスカウト運動が活発化してきた。
2 年後も世界ジャンボリーが開催されることから、山口市内のボーイスカウト活動が今後ますます活発になることが予想される。

◆苦勞した点

- ・準備は去年の 10 月から始まり、リーダー、スカウトとの調整、事前の準備品、準備訓練等、参加隊としての準備が本当に大変であった。マーキーテント等は高額の準備品であり、購入できずに困っていた。
- ・アジアのスカウトが多く参加し、英語を使う場面が多かったが、能力不足で苦勞した。
- ・活動期間中、突然の嵐で機材が壊れ、大変であった。

◆今後の課題・発展の方向性

2 年度には世界スカウトジャンボリーが、今年と同じく山口市きらら浜で開催されるので、今回の日本ジャンボリーで通関した語学力不足について今後のスキルアップが必要と感じた。(リーダー、スカウト共)
今回のジャンボリーはマスコミにも多く取り上げられ、地元ではかなりボーイスカウトの認識が高まったので、地元団がますます活発になるよう取り組んでいきたい。

◆活動を終えての感想・意見等

8 月のもっとも暑い中でのキャンプで健康問題が一番心配していました。活動期間中、熱中症で休むスカウトも多かったのですが、参加した 34 名が無事に帰ることができほっとしています。
子ども達の感想文を見ると「つらかったけど、楽しかった」という言葉が多く、非常にいい経験をさせることができたのではないかと思います。
マツダ財団の支援のおかげで、必要機材もそろえられ、途中の嵐(風速 30m/s 以上)で古いテントは 2 つ破損しましたが購入したテントは耐えてくれました。
今後の活動でもフルに活用させていただきます。本当にありがとうございました。

活 動 名	団 体 名	こどもっちゃ！商店街実行委員会
こどもっちゃ！商店街	地 域	山口県周南市
	代 表 者	実行委員長 清水 芳将
	支援金額	50 万円
活動概要		
①子どもの販売・接客体験、職業体験を84職種実施		
8：30～	お仕事カード（求人票）配布	
10：00 または 10：30～ ※時差で受入を分割 して運営を円滑化	1 回目	・朝礼（オリエンテーション、あいさつ練習等）～各職場に移動 ・各職場で職業体験（基本は 50 分程度。商店街の個店のほか、 地元企業ブース、臨時店舗も開設） ・ふりかえり（アンケート記入等） ・給与明細書、会場内通貨（労働対価）受取り
11：30 または 12：00～	2 回目	（同上）
13：00 または 13：30～	3 回目	（同上）
15：30	終了	
②子どもが企画・運営する店舗を実施(3店舗)		
③こどもフリーマーケットを実施(14ブース)		
◆実施時期		
時期:平成 25 年 11 月 23 日(土・祝)10:00～15:30		
場所:徳山商店街一帯		
◆参加人数		
職業体験した子どもの数:のべ 830 名		
来場者数:10, 000 名(家族・一般来場者を含む)		
		参加総人員:10,000 名



化粧品屋さんでお化粧の仕方を教えてもらう



子ども企画運営店舗(わたがし)



商工高校と地元企業が共同開発した「周南ラーメン」の販売体験



中高生のボランティアが参加者(小学生)のお世話をします

◆実施に伴う効果

- ・アンケートでは、参加した小学生だけでなく、実行委員、中高大学生等の当日ボランティア、参加店舗・企業等、さまざまな立場の方が「また参加したい」と回答しており、継続実施しやすい環境ができつつある。特に中高大学生のボランティア参加が、年々増えている。
- ・徳山周南法人会青年部会が、納税意識の向上のため、20Moccha！（会場内通貨の単位）分の架空の源泉徴収を行ったこととする給与明細書を発行していただき、よりリアルな職業体験となった。

◆苦勞した点

- ・全体的には、大きな苦勞点はなかった。
- ・予算的には、マツダ財団様からの支援金のおかげであり苦勞はなかったが、協賛金の1口の額を増額したためか他企業からの協賛金が思ったよりも少なかった。
- ・参加店舗・企業の最終決定が11月上旬にずれ込んだため、チラシの作成・配布が遅れた。
- ・勤勞感謝の日が土曜日と重なったため、スポーツ少年団等他の行事があり、参加できなかった子どもが多かったようである。また、銀座通りの飲食関係の臨時店舗が前回よりやや少なかったことと、福知山花火大会露店爆発事故を教訓として出店間隔にゆとりを持たせたことから、人出が少ないという印象を持った方もいた。
- ・職業体験の口数は維持できたが、日程的に参加できなかった店舗・企業がいくつかあり、参加店舗・企業数が前回は下回った。

◆今後の課題・発展の方向性

- ・新たな人材の発掘・育成を含めた、持続可能で発展性のある実行委員会体制にしていく。
- ・企画段階からの中高大学生の参画について、検討・働きかけをしていく。
- ・協賛金を含めた、地元企業等の支えによる財源確保を図る。
- ・子どもが店舗を企画・運営する「お店を作ろう」の継続と拡大を図る。
- ・幼児向けのコーナー等の設置を進めていく。

◆活動を終えての感想・意見等

まずは、予算面で大きく支えていただいたマツダ財団様にお礼を申し上げたい。
今回は、お仕事カード（求人票）の配布場所「こどもっちゃ！ハローワーク」の場所を変更するという大きなチャレンジがあったが、無事終わることができ、実行委員会に地力がついてきたことを実感している。
イベントそのものも、参加した小学生だけでなく、実行委員、中高大学生等の当日ボランティア、参加店舗・企業等、さまざまな立場の方が「また参加したい」と言ってくれるイベントに成長した。次回は、第1回に参加した6年生が高校生となる。イベントの継続・発展とともに、子どもたちが参加者からボランティアへ、そして実行委員会へと継続して関わっていただけるような息の長いイベントにしていきたい。

活 動 名	団 体 名	NPO 法人下松べんけい号を愛する会
「SL べんけい号の復元」をテーマにした地域活性化と子育て支援イベントの開催	地 域	山口県下松市
	代 表 者	事務局長 栗田 一郎
	支援金額	20 万円
活動概要	2013 年度は次の 3 つのイベントを通じて、幼稚園・小学校・行政と協働して、「下松べんけい号」の情報発信、世代間交流などの成果を目指しました。 ①「下松べんけい号」の情報発信のためのイベントとして、「107 才おめでとう！ べんけい号への年賀状コンクール」を今後も恒例化。 ②「べんけい号まつり」を開催して、子供たちにカートンでのミニべんけい号工作や、手品、絵本の読み聞かせ、紙しばい、人形劇、バザーなどで、3世代交流による子育て支援を実施。 ③また、園児・小学生を対象にした「べんけい号スケッチ大会」を実施。 ④NPO 法人化を行い、登記しました。 ◆実施時期＆参加人数 ①子育て支援「べんけい号まつり」9/29(日)9～17 時 会場:ほしらんどくだまつ(中央公民館) 内容:絵本の読み聞かせ、紙芝居、手品、ミニ SL(N・G ゲージ)展示走行、SL カートン 参加スタッフ 15 名、来場者 のべ 400 名、 ②「べんけい号スケッチ大会」9/29(日)10～16 時 まつりと別会場 会場:市役所グリーンプラザ(べんけい号展示庫前)来場者 のべ 40 名 ③「107 才おめでとう、べんけい号への年賀状コンクール」12/7～1/26 会場:スターピアくだまつ、ほか。応募総数 367 点、表彰 36 点。 ④NPO 認証登記記念交流会 2/22(土) 17～21 時 会場:ほしらんどくだまつ 内容:役員・会員・サポーターの交流会、参加 30 名 参加総人員:900 名以上	



スケッチ会



べんけい号まつり



年賀状コンクール

◆実施に伴う効果

- ①「まつり」は当会の単独開催(2回目)だったが、驚くほど多くの参加者があった。
この開催には、周南エリアの子育て支援活動グループが、手弁当で熱心に実演参加してくれた。彼らとの交流体験も、大きな成果の一つだ。理事たちは多大の労力を投入したが、それ以上の達成感があった。
- ②スケッチ、年賀状の作品公募での表彰式と作品展示には、子どもや親など多くの参加者に共感の輪が広がっていったことを実感できて、本当にうれしかった。素晴らしい子どもたちと、保護者の皆さん方だった。この子どもたちが、これからもすすくと個性を伸ばして行って、立派な社会人(おとな)になってくれることを、切に願っている。

◆苦勞した点

当会のイベントに関しては、市内の各校・各園が協力的であり、大きな問題はない。

◆今後の課題・発展の方向性

女性の理事を登用したい。
SL 関連活動と言うイメージのせいか、現在は理事の全員が男性であり、いびつだと思う。むづかしいが、なんとか工夫して女性理事を獲得したい。

◆活動を終えての感想・意見等

貴財団からの助成につきまして、大変ありがたく、感謝申し上げます。おかげさまで黒字決算が出来ました、また NPO 法人化も達成できました。

- ①多少遠隔地ではあるが、財団関係の方にぜひイベントを見学、視察していただきかったです。
- ②われわれの「下松 べんけい号を愛する会」は、当市に在る 1907 年に国産された SL、通称「下工 弁慶号」の復元活動をタテ糸に、世代間交流による地域社会の活性化をヨコ糸にして、新しい諮問活動の「布」を織るささやかな試みです。
べんけい号という地域の産業遺産を活用したこれらの協働によって、シニア層の仲間の活用と、世代間交流、それによる子育て支援施策の、この3要素の有機的な結合が実現できるものと、私たちは確信しています。

活 動 名	団 体 名	ボランティア琴音の風
	地 域	山口県防府市
	代 表 者	代表 臼井 大和
	支援金額	25 万円
子供達と自然に学ぶ		
活動概要		
防府市富海の「琴音の滝」と「大平山登山道」の整備・植樹、および高齢化による放棄水田や休耕地を利用したジャガイモ、さつま芋、もち米(合鴨農法)作り これらを地元の保育所、小学校、中学校、(本年度は一部を県立大生)と行い、自然とのふれあい及び自然の大切さを共に学んだ。 ◆実施場所 防府市富海の琴音の滝大平山登山道の周辺、田畑、国津姫神社境内 ◆参加人数 ホタルのタベ 300 名、文化祭 300 名、育苗・田植え・稲刈り 延べ 67 名 三世代交流 24 名、ジャガイモ・さつま芋の植付け、収穫 延べ 106 名 植樹・土嚢運び 延べ 92 名、他 392 名 延べ参加人員:1,281 名		



巣箱作り(小学3年生)



稲刈り(小・中学生)



しめ縄作り(中学生)



餅つき(保育所)

◆実施に伴う効果

- ①子どもたちは自然とのふれあいの喜びを感じたと思える
- ②餅つきのモチ及び餅つき体験は希望者が多い
- ③登山道の整備と植樹により富海から大平山登山若しくは下山が増えた
- ④子どもたちの感想の中には富海のことを改めて考えるようになったとの言あり

◆苦勞した点

学校行事との調整
メンバーの高齡化と行事参加メンバーの減少(無理が利かない)

◆今後の課題・発展の方向性

ボランティア活動の範疇をどこまでとするか
後継者がいない

◆活動を終えての感想・意見等

中山間地に位置する防府市富海に於いて、美しい自然を子ども達へのコンセプトのもと、中高年のメンバーの生き甲斐にも通じる活動として休耕田の活用による子ども達の野外活動の場を提供し、農作物を作ることで地域とのふれあい、自然の大切さ知ってもらうこの活動を体力と気力の続く限り頑張ります。

活 動 名	団 体 名	NPO法人子ども劇場山口県センター
チャイルドラインやまぐち開設 10 周年記念 チャイルドライン夢メッセージ展	地 域	山口県宇部市
	代 表 者	理事長 三好 美喜子
	支援金額	20 万円
活動概要		
子どもたちが、絵本の世界を楽しみ、アート体験をすることで、本が好きになったり創造性を育むとともに、親子でゆったりとした時間を共有し子どもへの理解を深め、暖かい眼差しを向ける大人が増えることを目指している。 1.絵本ひろば約 500 冊の絵本、読み物を展示し、ゆったりと読書を楽しむ場を持つ 2.アート体験では、ワークショップ「感覚アスレチック」で自分の体を見つめる 3.工作教室は、輪ゴムと枝の工作、万華鏡、くるくるレインボー、人形あそび 4.その他 茶道体験、絵本の読み聞かせ 5.人形劇「あかずきんちゃん」鑑賞 ◆実施時期 2013 年 8 月 9 日(金)～12 日(月) 10:00～18:30(最終日は 16:00 まで) ◆参加人数 ①8/9(金)135 名(大人 81、子ども 30、スタッフ 20、指導者 4 内アート体験 35(親子参加もあり)) ②8/10(土)124 名(大人 76 名、子ども 25 名、スタッフ 22 名、指導者 1 名 内アート体験 40) ③8/11(日)226 名(大人 115 名、子ども 90 名、スタッフ 19 名、指導者 2 名 内アート体験 61) ④8/12(月)159 名(大人 64 名、子ども 67 名、スタッフ 25 名、指導者 3 名 内アート体験 105(親子参加もあり)) 参加総人員:644 名(大人 336、子ども 212、スタッフ 86、指導者 10、内アート体験 241)		



500 冊の絵本展示コーナー



読み聞かせ



作ってみよう！不思議アートの世界 3D万華鏡



ワークショップ「感覚アスレチック」

◆実施に伴う効果

- ・会場を提供してくださっている宇部井筒屋の同じ階で、子育て支援「子育てほっとサロン」が常設されているが、夢メッセージ展会期中は、ほっとサロンの参加者が多かったと喜ばれた。
- ・他の子育て支援団体とパネル展示のコーナーを設けたが、日ごろ出会えない団体との交流の場になった。

参加団体:うべ★子ども 21、子育てほっとサロン、CAPうべ、宇部レクリエーション協会、子どもメディア山口

◆苦勞した点

- ・絵本ひろばをメイン企画にしているが、どうしても幼児対象とられチャイルドラインとは対象年齢がちがうのではないかとということが問われてきた。小学生たちも呼び込むために、アート体験企画を魅力的にしようと策を練った。結果、輪ゴムと枝の工作、万華鏡作り、感覚アスレチックワークショップにつながった。参加した子どもたちからは面白かったと好評だった。
- ・外部へのPRは、チラシを 2000 部作成し、いつもの図書館や市民活動センター、文化施設に置いていただくが、夏休みで学校から配布ができず、学童クラブや青空読書会など細かく配布した。
- ・アート体験企画の万華鏡作りでは、宇部市が力を入れている「宇部探険博覧会」の子ども版「キッズうべたん」に応募して広く呼びかけ、事前に定員を越える参加者が獲得できた。
- ・初めて取り組んだ「感覚アスレチック」ワークショップは、その魅力を伝えることができなくて思ったほど人が集まらなかった。参加した子どもたちは高い評価だったが。
- ・来場者が、子どもと本とゆったりした時間を過ごして欲しいと思ったが、みなさん忙しく工作が済むと、絵本展示は通過してさっさと帰られたり、意図することはなかなか伝えられない。数的には少ないが、親子で長く滞在し、子どもも好きなだけ好きな本が読めて嬉しかった。来年もまた来たいとアンケートに残してくださった方もあり、絵本ひろばは続けようと話し合っている。
- ・来場者をもっと増やしたい。会場が子ども向きとは言えないが、雰囲気が良い。

◆今後の課題・発展の方向性

- ・絵本ひろばをメインとするならば、もっと本の内容が伝わるまたは深まる展示の工夫が必要と感じた。今からチームを組んで準備していく予定。
- ・アート体験は、小学生の子どもが夢中になって取り組む姿が特に印象的。あれだけ打ち込めれば達成感も大きいと思う。嬉しい、楽しい、やったという満足を充分あじわって欲しいと思う。今の子どもたちに、アート体験は必要な企画として続けていきたい。

◆活動を終えての感想・意見等

- ・どの場面でも、子どもたちはとても真剣に取り組んでいた。
- ・子どもは絵本が好き！と感じた。機会さえあればもっと親しむことができると思う。

活 動 名	団 体 名	彦島山中町自治会
	地 域	山口県下関市
小学生からゴミ問題対策教育	代 表 者	会長 酒井 能具
	支援金額	20 万円
活動概要	地域で生活する時に、まず難儀するのがゴミ問題です。回収されない違反ゴミがあるとゴミステーションは汚れの巣窟となり、タバコなどのポイ捨てを放置すると、汚れた町が定着します。汚い町は、児童の清潔な意識を蝕み、健全な市民としての教育そのものの根底を揺すぶります。 「鉄は熱いうちに打て」のことわざのごとく、小学生から始める環境教育活動により保護者を含めた住民の環境意識の広がりを狙い、以下のような活動を行いました。 ◆実施時期＆参加人数 (1)ゴミ収集違反に対する啓蒙活動・・・通年実施、418 名 (2)小学生対象の環境問題について学習(映像利用)とゴミ分類体験・・・7 月 12 日、72 名 (3)夏祭り時を利用したゴミ分類啓蒙・・・7 月 23 日、24 名 (4)児童の地区大掃除への参加とノコギリ体験・・・7 月 28 日、45 名 (5)高齢者も参加する連携強化行事(もちつき)・・・12 月 22 日、53 名 参加総人員:612 名	



プロジェクターを利用した小学生の環境(ゴミ)学習内容



ゴミ収集違反に対する啓蒙看板



地区大掃除参加後のノコギリ体験



高齢者も参加する連携強化行事(もちつき)風景

◆実施に伴う効果

- (1)ゴミ問題の学習を小学生から始めることが定着してきました。
- ・小学校で毎年、ゴミ学習授業に取り組んでくれるようになり、将来の展望が開かれました。
 - ・地域の環境問題は「ゴミ収集場所の汚れと公園、道路のポイ捨てゴミの放置」です。「鉄は熱いうちに打て」のことわざのごとく、小学生から始める環境教育活動により保護者を含めた住民の環境意識の広がりを狙った活動が定着してきました。
- (2)地域が子供を育て、地域は子供から元気を貰う活動が一步前進しました。
- ・ノコギリ体験や餅つき行事により、高齢住民と児童の交流が活発化しました。
 - ・これにより、地域のおじいさん、おばあさんの知恵や温もりを児童に与えることができました。
 - ・以下のような社会情勢のなかで、健全な市民育成のための教育に寄与できたと考えます。
- (社会情勢)
- ・さまざまな理由により、自分の祖父母と一緒に過ごすことがない児童が増えてきています。昭和時代までは、地域や家庭に年寄りが身近におり、生活上の技や知恵を受け継ぐことが普通にできる世の中でしたが、近年、この大事な社会の仕組みが壊れているように思われます。
 - ・私どもの自治会は、これを補うため、地域として子供を育てる活動を目指しており、今回、その一步前進の成果がありました。又、参加した高齢者から、「よかったね、又やろうね」との言葉を頂いています。

◆苦勞した点

【予算】

単年度の助成だけでは、折角の効果が萎んできます。新しい活動への門戸を広げることも大事だと思いますので、3年間の継続助成の実現をお願いします。

【参加者】

保護者は母親も働く人が多く、協力者の確保が難しいので、高齢住民が頼りですが、年金支給年齢が高年齢化していることも影響し、まだまだ働く高年齢世代も増えており、活動協力者が将来確保できるか心配要素となっています。

【地域の理解】

地域で子供を育てようとの活動は、地域住民の間に理解が広がってきています。この活動は、地域の高齢住民の社会参加を促進する効果があり、地域興しの大事な柱の一つとなっています。

◆今後の課題・発展の方向性

今後、中学生にも活動を広げたい。

子供たちに、おじいさん、おばあさんの知恵、経験を伝え、手作業を沢山、体験させたい。

手作業することで、様々な体験ができ、沢山の失敗経験と、それからの修復経験を得ることができる。これが、一生役立つ知恵となる。このような活動により、理科への興味も惹起し、ものづくりへの興味も惹起させたい。

◆活動を終えての感想・意見等

活動することにより、町が明るくなっているように思います。子供たちと馴染みになり、町民の皆さんから、よかったねという声が聞こえてきます。もっともっと、活動を広げていきたい。

活動名 こども元気塾 with 清光	団体名	こども家庭支援センター清光
	地域	山口県山口市
	代表者	センター長 浅川 寛信
	支援金額	20 万円
活動概要		
児童家庭支援センター（児童養護施設清光園に附置される）における子育て支援事業として実施している「こども元気塾with清光」ですが、当塾の親子による体験教室が、単なる体験だけでなく、子育てに悩むご家庭への支援（父親の子育てへの参加、協力へのきっかけ作り）や、不登校の児童における居場所づくりにも寄与しています。 また、今年は助成金を活用し美祢市秋吉への「バスハイク」を敢行し、大自然の中親子による森林浴、自然観察も経験することができました。また、年末の回では数年ぶりに「お餅つき」と「正月飾り作り」を実施。最近では、地域の子供会でもされることない「石臼」と「杵」による餅つきを体験することが出来ました。また、新しい年を迎える準備を、こどもも大人も一緒になって、自ら手作りする貴重な機会となりました。残念ながら、夏に予定されていた「カヌー・ボート教室」については台風のため中止、その後延期も検討いたしましたが、実施することはできませんでした。 ◆実施時期 2013 年 5 月～2014 年 2 月 山口市阿知須、秋穂、美祢市秋吉等 ◆参加人数 幼児 14 名、児童 183 名（中学生 1 名含む）、保護者 70 名、スタッフ 68 名 参加総人員延:335 名		



秋バスハイキング



春キャンプ



あじすふれあいまつり(焼き芋)



みんなでお餅つき

◆実施に伴う効果

- ・事前に準備した遊休品と、手作り品をもとに地域のおまつりへ出店
- ・参加する児童も時間帯ごとに、お店の売り子、裏方をその場で決めて、一般の来場者に販売するという「真似事」ではあるが遊びではない、「社会体験」(実際にお金を扱い、販売しその報酬を受け取る)を实践。生まれて初めて「仕事」の大変さを知ったという児童の感想を聞いた。
- ・参加した保護者、児童から地域のこども会活動や、家庭では出来ない年中行事、このたびは「もちつき」「正月飾り」作りを初めて体験し、親子ともども日本の伝統行事を体験する貴重な機会になったと、感謝される方が多くおられた。

◆苦労した点

- ・今回初となる「春のキャンプ」を実施したが、「こども元気塾」自体に参加することが初めての児童も多くいて、グループとしてのまとまりを意識させ、目的意識を持たせることが、いつも以上に難しさを感じた。
- ・また、このたびは当センター(こども家庭支援センター清光)の支援するご家庭の親子も参加され、「日頃体験出来ない」経験が出来たと喜ばれる反面、特性のある児童による参加ということで、スタッフ自身への負担もこれまでよりも大きくさせてしまったので、年初および各回ごとに説明と配慮が必要と考える。

◆今後の課題・発展の方向性

- ・こどもの居場所作りの意義は、参加者および地域の方々のもわずかずつであるが、浸透しつつあるが、カリキュラムやイベントの内容に新鮮味が欠けてきていることについては、スタッフの意見もある。
- ・今回初の試みとして協力いただいた「アンケート」をもとに、次年度以降の活用計画の立案に役立てていきたい。

◆活動を終えての感想・意見等

- ・貴重な助成金のおかげで、秋はバスハイキングも数年ぶりに実施でき、またとない秋吉の「秋」もおとな、こどもともども経験をさせていただき、次年度に弾みのつく活動となったと自負いたしております。スタッフ一同、感謝の念でいっぱいでございます。ありがとうございました。

第 29 回(2013 年度) マツダ財団市民活動支援 贈呈式



《広島県》



《山口県》



《NPO こどものひろばヤッチャル》



《特定非営利活動法人千羽鶴未来プロジェクト》



《学生ボランティア団体 OPERATION つながり》



《ロボカップジュニアジャパン広島ブロック》



《市民活動で映画製作をする会》



《特定非営利活動法人ピピオ子どもセンター》



《日本語教室ピース》



《NPO 法人ほしはら山のがっこう》



《戸河内小学校夢配達人プロジェクト実行委員会》



《NPO 法人おおのの風》



《特定非営利活動法人よもぎのアトリエ》



《広島市立大州小学校 カンナプロジェクト》



《大朝地域資源保全隊》



《福山市立鞆小学校鞆探検クラブ》



《NPO 法人いきいき農業応援し隊》



《特定非営利活動法人これからの学びネットワーク》



《ワンダー・ティーンズ》



《こどなひろば中国支部》



《特定非営利活動法人NPO狩留家》



《府中町災害ボランティア赤十字奉仕団》



《特定非営利活動法人SPICA(スピカ)》



《福島と広島をつなぐ会》



《呉市市民公益活動団体Team JIN「仁」》



《ほんわかプロジェクト応援団》



《日本ボーイスカウト山口県連盟山口第3団》



《こどもっちゃ！商店街実行委員会》



《下松べんけい号を愛する会》



《ボランティア琴音の風》



《NPO 法人子ども劇場山口県センター》



《彦島山中町自治会》



《こども家庭支援センター清光》

マツダ財団青少年健全育成市民活動支援

第 28 回 (2012 年度)

活 動 名	団 体 名	地 域
第 6 回神楽ふれあい鑑賞会ヒロシマ	神楽ふれあい実行委員会ヒロシマ	広島県広島市
学校の裏にある公園を整備して、虫ランドづくり	広島県安芸高田市立小田東小学校	広島県安芸高田市
家庭崩壊により非行に陥った少年達を地域の力で支え、育む活動	食べて語ろう会	広島県広島市
学力支援活動	特定非営利活動法人 みよし子育て学び支援あすなろ	広島県三次市
日本の伝統に触ってみよう！ 観て・聞いて・感じて…狂言まるごと体験	青少年育成吉舎町民会議	広島県三次市
「ようこそさかないち」～地域のだれもが集い賑わう朝市を～	特定非営利活動法人 夢の広場 よこそ	広島県広島市
障がい児の余暇活動と支援	府中町手をつなぐ親の会	広島県安芸郡
永慶寺川の多様な自然を守り、育てる活動（環境美化とホテルを守り育てる活動）	永慶寺川の自然を守る会	広島県廿日市市
間伐材を活用したログテントづくり	特定非営利活動法人 メセナSUN-CLUB 学びの森	広島県東広島市
甦れ！みんなの生きがい	学生ボランティア団体OPERATIONつながり	広島県東広島市
2012 年度 I PRAY定期公演・東日本支援公演	特定非営利活動法人 I PRAY	広島県広島市
三次市茂田地区における住民と小学生の協働によるツキノワグマ出没対策活動	特定非営利活動法人 生物多様性研究所あーすわーむ	広島県三次市
学習機会をすべての子ども達に与えたい	特定非営利活動法人 地域福祉活動支援協会人間大好き	広島県東広島市
子どもシェルターの運営	特定非営利活動法人 ビビオ子どもセンター	広島県広島市
幼児～小中学生とのふれあいを大切に！	府中町子ども応援隊	広島県安芸郡
行動人となれ！「ぼくらの未来はどうなる」 地球環境から知るこれから…	特定非営利活動法人 熱帯森林保護団体ひろしま	広島県広島市
安芸高田市向原町長田地区における通学路周辺の竹林の環境整備および放置された資源の活用	特定非営利活動法人 里山環境サポートセンターサポートセンター	広島県広島市
廿日市市長期宿泊自然体験活動推進プロジェクト	特定非営利活動法人 自然体験活動推進センター	広島県広島市
児童生徒へのフードバンク活動を通じた食育活動	特定非営利活動法人 あいあいねっと	広島県広島市
冒険遊び場 in ひろせふれあいの丘	ひろせ冒険遊び場運営委員会	広島県福山市
武術・読書を通じて、日中両国の文化を学ぼう	子供友好会	広島県広島市
安地区まちづくりブランプロジェクト「おとなりさん」	安地区まちづくりブランプロジェクト「おとなりさん」	広島県広島市
「三原さんプロジェクト」手作り太陽光発電パネル＋外灯設置ワークショップ	かんきょう会議 浮城	広島県三原市
「尾道空き家再生！夏合宿」小学生のためのツリーハウス作り体験	特定非営利活動法人 尾道空き家再生プロジェクト	広島県尾道市
中高校生を被災地の役に立てる人材に育てる事業	特定非営利活動法人 よもぎのアトリエ	広島県広島市
内海グリーンキャンパ	特定非営利活動法人 元気っ子プロジェクト	広島県福山市
スカイワークス	社団法人 山口青年会議所	山口県大島郡
ものづくり科学教室	日本宇宙少年団 周南分団	山口県光市
発達障害のある子どもや学校にいけない子ども達への支援	特定非営利活動法人 サポートクラブ翔	山口県周南市
地域でできる先駆的多文化共生事業「外国人留学生家族の子育て支援」等による親子留学生の育成	国際交流ひらかわの風の会	山口県山口市
小学生のキャリア教育「Kids Café」でカフェ運営	特定非営利活動法人 コミュニティ友志会	山口県防府市
合 計 32 件 800 万円		

第 27 回 (2011 年度)

活 動 名	団 体 名	地 域
各種陸上競技大会の開催と青少年の健全育成	府中陸上競技協会	広島県安芸郡
こわれたおもちゃの修理をとおして青少年の健全育成と環境保全事業	ひろしまおもちゃ病院	広島県広島市
東区障害児のためのサマースクール	東区障害児のためのサマースクール	広島県広島市
子供への居場所提供	食べて語ろう会	広島県広島市
親子で体験！五感で実感！大きな発見	みやま未来ミーティング	広島県広島市
カーブと市民の物語 紙芝居化プロジェクト	プロジェクトC	広島県広島市
エコINNくろせ「わになれ黄金小麦」	エコINNくろせ	広島県東広島市
太田川アクティブアーチ ワークショップ体験	太田川アクティブアーチ実行委員会	広島県山県郡
手作りの紙人形劇(ペープサート)を通じて地域を元気にする	夢配達人プロジェクト 玖島実行委員会	広島県廿日市市
「みらい座」朗読劇『福山空襲』10 周年記念公演	特定非営利活動法人みらい福山	広島県福山市
2011 年度「直美の部屋」コンサート	直美の部屋	広島県三原市
広島県内に於ける小中学生のロボット競技体験活動	ロボカップジュニア広島ブロック保護者会	広島県広島市
永慶寺川の多様な自然を守り、育てる活動	永慶寺川の自然を守る会	広島県廿日市市
子どもシェルターの開設・運営	ビビオ子どもセンター	広島県広島市
第 4 回(財)日本ダウン症協会中国ブロック大会 in 広島	(財)日本ダウン症協会広島支部 えんぜろふいつしゅ	広島県広島市
高校生による「太田川学」研究	高校生環境ネットワーク広島	広島県山県郡
吉島地域の町職人と留学生が連携した「小学生のための物づくり体験」	よしま職人工房	広島県広島市
NPO・NGO ユース・インターン・プログラム(YIP)	ひろしま市民活動ねっとわーく HEART to HEART	広島県広島市
世界の遊びを体験してみよう！	カモミール～ラマシカ～	広島県東広島市
野生への挑戦 子どもキャンプ	まちづくりジュニアスタッフ“ACT”(アクト)	広島県大竹市
通学合宿	通学合宿実行委員会	広島県東広島市
人と自然とのふれあい	大人のかくれ家倶楽部	広島県広島市
府中町子ども応援隊	府中町子ども応援隊	広島県安芸郡
ONE HOME PROJECT(ワン・ホーム・プロジェクト)	Global Bridge	広島県広島市
世界に届かないグローバルな子どもの健全育成支援活動	ふれあいの森なんでも工房	山口県周南市
しゅうなん子どもドリームスクール	ドリームスクール実行委員会	山口県周南市
おごおりウィークエンドアドベンチャー	おごおりウィークエンドアドベンチャー実行委員会	山口県山口市
ものづくり科学教室	日本宇宙少年団 周南分団	山口県光市
ホテル飼育施設の整備	富海をホテルの里にする会	山口県防府市
地域における青少年のための多文化共生事業	国際交流ひらかわの風の会	山口県山口市
障がい者スポーツ教室	障害児(者)サポートクラブ翔	山口県周南市
合 計 31 件 800 万円		

市民活動支援

1. 募集・応募・選出状況

第29回(2013年度)青少年健全育成市民活動支援を以下により実施しました。

(1) 募 集

募集要項記載概要は、以下のとおりです。

- | | |
|--------------|--|
| (a) 対象活動 | 青少年の健全育成を目的とした、民間の非営利活動
①自然とのふれあい ②ボランティア育成 ③地域連帯
④エコ ⑤国際交流・協力 ⑥科学体験・ものづくり |
| (b) 募集地域 | 広島県、山口県 |
| (c) 支援期間 | 単年度支援 2013年4月1日～2014年3月31日の1年間 |
| (d) 支援金総額 | 800万円 |
| (e) 1件当り支援金額 | 10万円～50万円 |
| (f) 募集期間 | 2012年10月15日～2013年1月11日 |

(2) 応募状況

締切日までに100件の応募を受理しました。その内訳は、以下のとおりです。

- | | | |
|---------|-------------|----------|
| (a) 地域別 | ・広島県 | 41件(41%) |
| | ・広島市 | 36件(36%) |
| | ・山口県 | 23件(23%) |
| (b) 分野別 | ・自然とのふれあい | 22件(22%) |
| | ・ボランティア育成 | 12件(12%) |
| | ・地域連帯 | 39件(39%) |
| | ・エコ | 6件(6%) |
| | ・国際交流・協力 | 12件(12%) |
| | ・科学体験・ものづくり | 9件(9%) |

(3) 支援対象の選出

選考委員会(2013年2月22日、23日開催)での審議の結果、支援候補として、総計31件
800万円が選出され、2013年3月25日開催の第11回理事会において正式に承認決定されました。

(4) 支援金贈呈書の贈呈

- ・広島県 2013年4月17日、マツダ株式会社本社で贈呈式・交流会を開催。
広島県内の24団体に対して、支援金贈呈書を贈りました。
- ・山口県 2013年4月22日、マツダ株式会社防府工場で贈呈式・交流会を開催。
山口県内の7団体に対して、支援金贈呈書を贈りました。

2. 支援件数の推移

本年度を含む3年間の支援件数、内訳は次のとおりです。

(応募件数および支援件数)

	本年度(第29回) 2013年度	第28回 2012年度	第27回 2011年度
応募件数 (件)	100	108	97
支援件数 (件)	31	32	31
支援比率 (%)	31	30	32
支援金総額 (万円)	800	800	800

(地域別状況)

地 域	2013年度		2012年度		2011年度	
	応募件数	支援件数	応募件数	支援件数	応募件数	支援件数
広島県 (件)	41	11	40	14	36	12
広島市 (件)	36	13	38	12	32	12
山口県 (件)	23	7	30	6	29	7
合 計 (件)	100	31	108	32	97	31

(左側数字：応募件数、右側数字：支援件数)

(分野別状況)

分 野	2013年度		2012年度		2011年度	
	応募件数	支援件数	応募件数	支援件数	応募件数	支援件数
自然とのふれあい (件)	22	5	15	3	19	6
ボランティア育成 (件)	12	5	19	5	10	3
地域連帯 (件)	39	12	54	13	45	13
エコ (件)	6	1	5	3	3	2
国際交流・協力 (件)	12	4	5	3	13	4
科学体験・ものづくり (件)	9	4	10	5	7	3
合 計 (件)	100	31	108	32	97	31

(左側数字：応募件数、右側数字：支援件数)

役員・評議員名簿

平成 26 年(2014 年)7 月 1 日現在

財団役職	常・ 非常勤	名 前	役 職
理 事 長 (代表理事)	非	金 井 誠 太	マツダ株式会社代表取締役会長
専務理事 (代表理事)	非	吉 原 誠	マツダ株式会社執行役員・総務・法務室長
常務理事 (業務執行理事)	常	魚 谷 滋 己	公益財団法人マツダ財団事務局長
理 事	非	上 田 宗 岡	上田宗箇流家元
理 事	非	岡 谷 義 則	株式会社中国新聞社代表取締役社長
理 事	非	高 橋 超	広島大学監事
理 事	非	浜 中 典 明	公益財団法人広島市文化財団常務理事
理 事	非	平 谷 優 子	弁護士
理 事	非	山根 八洲男	広島大学大学院工学研究院特任教授
監 事	非	友 田 民 義	公認会計士
監 事	非	藤 本 哲 也	マツダ株式会社執行役員・財務本部長
評 議 員	非	浅 原 利 正	広島大学長
評 議 員	非	安 藤 周 治	特定非営利活動法人ひろしま NPO センター代表理事
評 議 員	非	大 杉 節	広島大学宇宙科学センター特任教授
評 議 員	非	小 柴 是 睦	公益財団法人中国電力技術研究財団専務理事
評 議 員	非	佐 藤 次 郎	一般財団法人日本語教育振興協会理事長
評 議 員	非	進 士 正 人	山口大学大学院理工学研究科長・工学部長
評 議 員	非	杉 本 俊 多	広島大学大学院工学研究院長
評 議 員	非	竹 林 守	マツダ株式会社名誉相談役
評 議 員	非	中 村 健 一	県立広島大学長
評 議 員	非	長尾 ひろみ	公益財団法人広島県男女共同参画財団理事長
評 議 員	非	農 沢 隆 秀	マツダ株式会社技術研究所長
評 議 員	非	吉 田 総 仁	広島大学副学長
評 議 員	非	渡 辺 一 秀	マツダ株式会社相談役

(五十音順・敬称略)